

『学問のすすめ』のリテラシー論的再解釈 (1) : 「初編」および「二編」の「端書」

笹川, 孝一

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学キャリアデザイン学部紀要 / 法政大学キャリアデザイン学部紀要

(巻 / Volume)

3

(開始ページ / Start Page)

3

(終了ページ / End Page)

63

(発行年 / Year)

2006-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004299>

『学問のすすめ』のリテラシー論的再解釈(1) 「初編」および「二編」の「端書」

法政大学キャリアデザイン学部教授 笹川孝一

はじめに

ここに記したものは福澤諭吉の代表的著作『学問のすすめ』全十七編の内、「初編」と「二編端書」についてのリテラシー論的観点からの「現代語訳」「解説」および多少の「語句」説明である。具体的作業を示す前に、700ページ近くある大部の注釈書や数点の現代語訳がある『学問のすすめ』について、なぜあえて、こうした作業を行うのか？ まず、この点について述べておきたい。

1. 明治初期の日本・東アジアの古典としての『学問のすすめ』

『学問のすすめ』は、明治5（1872）年の初編の出版以後130年以上の歳月を経ているが、内容的に見て今日も新鮮さを保っている。それは、①まず、文字論を含む狭義のリテラシー論、学問論・実学論を展開し、今日の論点でもある「起業」と「実学」との関係、「実学」と「知識」の関係、「基礎学力」と「総合学習」との関係について、基本的課題を提出している。また、②日本においても今日、漸く成熟化しつつある市民社会のリテラシー。市民の権利、市民としての自立について、市民と政府との関係について、とくに「私立」として「改革」との関係を軸に、基本課題を提出している。関連して、第十四編の「心事の棚卸し」は、今日「キャリアの棚卸し」といわれるものの、一つの原型をなしている点で、注目される。③国際関係のリテラシー。「東アジア共同体」「東アジアサミット」「アジア太平洋共同体」が現実的課題として論じられ、「靖国問題」や日中韓関係や、「アメリカからの独立」を含めた日米関係国の自立が関心を呼んでいる今日、明治初年の福澤の論考が与える示唆は大きい。④

さらに、市民社会の成熟に向けた個人の自立とソサエティ形成の視点から、道徳論・人間交際論のリテラシーを積極的に提起している。⑤最後に、これらとの関連を意識して、『学問のすすめ』は、学者論・学校論・改革者論を積極的に提起している。

これらの内容が現在も与える示唆の新鮮さと、当時の日本社会に与えた影響の大きさ、著者福澤諭吉が日本と東アジアに与えた影響力の大きさゆえに、近年『学問のすすめ』の現代語訳が複数追加刊行されている。それらには「人は学び続けなければならない」「自分の道を自分で切り開くために」「自分が何をすべきかを知る」「日本で初めての成功哲学を読んでみよう」などの副題が付され、現代人にとっても「必読の書」とされている。他方、『学問のすすめ』は英語、フランス語、ドイツ語等のヨーロッパ言語訳だけでなく、私も参画した韓国語訳『学問の勸奨』（南相環・笹川孝一訳・解説 翰林大学日本学研究所『日本学叢書』70 ソウル 小花出版 2002年）や、中国語訳も出版されている。孫文の『三民主義』などと並んで、すでに、日本とアジアの近代化過程にかんする古典中の古典の一つになっていると言える。

2. 現代人にとって『学問のすすめ』が読みづらい理由

『学問のすすめ』は、『西洋事情』『世界国盡』『訓蒙窮理図解』等、福澤の一連の幕末・明治初期著作の一つである。これらの著作の特色の一つは、広く一般人の人を読者として想定しており、文体が平易な点にある。この平易な文体にも助けられて、今日もなお、多くの人々に読まれているが、実際に、ビジネス界で働く人々や学生たちに聞いてみると、やはり読みづらいという。

その原因として次の5点が考えられる。

1) 文語的表現

第一は、その文語的表現である。平易とは言っても130年前の文章なので、「言えり」「されば」「なさずして」「というべし」「となるなり」「ものなり」「學ぬれば」「なれども」「似たれども」「思いしこともなかりしが」「憚るに足らず」「なかるべからず」などの文語的表現が多くある。これが、「読みづらい」一因となっている。

2) 今日使用されない単語

第二は、現在はほとんど使われない単語の存在である。「畢竟」「窮理学」「分限」「役義」「不羈」「普請」「経書史類」「家督」「遊惰放蕩」「徳義」「苛政」「職分」などがその例である。しかもこれらの多くがキーワードになっていることが、「わかりづらい」原因の一つになっている。

3) 現代と意味が異なる単語

第三は、現在でも使われている単語ではあるが、130年前と現在とは、その意味が異なる単語である。「人」「民」「人民」「文学」「普通」「学者」「世帯」「身分」「道理」などがその例だが、現在も使われている単語だけに、誤解を引き起こしやすい。

4) 儒学的用語とコンセプト

第四は、儒学的用語の存在である。「天」「智」「物事をよく知る」「一身一家」「天理人道」「物事の理」「徳義」「先ず一身の行いを正し」「学に志し」などがその例である。これらについては、「天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教」「修身齐家治国平天下」「格物致知窮理」など、儒学の古典との関係を理解しないと、個々の箇所理解が難しい。それだけでなく、「大学」「中庸」という当時の士族や富裕な農民・町人などの平民なら誰でも知っていた常識の書き換え、新しい時代にふさわしい「人間普通日用に近き実学」と「身分」に従った「相応の才徳」の創造という、『学問のすすめ』初編そのものの基本テーマを読みとることができない。

5) 時代背景とそれにかかわる用語

最後に、時代背景および対象にかんする事柄である。「いろは四十七文字を習い」などの寺子屋の教程。「大抵のことは日本の仮名にて用を便じ」などの江戸時代の学術書が漢文で書かれていたこととの対比。「開港の後」「阿非利加の黒奴」「妄りに外国人を追い払い」「お茶壺」「御用の鷹」「外国の侮り」「余輩の故郷」「中津に学校を開く」など、時代背景にかかわる単語や表現である。これらについての理解を欠くと、特定の時代の中で書かれた臨場感、緊迫感を

理解することが難しくなる。

3. 先行する注釈書、現代語訳の成果と問題点

『学問のすすめ』の読みづらさを軽減し、より多くの人に読まれ、議論が盛んになるようにと、これまでに、いくつかの注釈書と現代語訳が出版されてきた。

私の知る限りでは次のようなものである。

1) 注釈書、解説書：

注釈書・解説書は、次の二点である。

- ①伊藤正雄著：『学問のすすめ』講説 風間書房 1969年
- ②ハイブロー武蔵：図解・速習 新訳『学問のすすめ』 綜合法令出版 2005年

前者は695ページにわたる学術書で、管見の限りでは唯一の本格的注釈書である。全体の『解題』の後に、各編の段落ごとに、本文を提示した後、「訳」＝現代語訳、「注」＝語句説明、「講」＝講義・説明を丁寧に述べている。内容上の特色は、次の三点にある。①アメリカ人イギリス人たちの著作の翻案的性格をもつ『学問のすすめ』の内容をウェーランドの『モラルサイエンス』等の「種本」と見られる著作と丹念に照合していること。②中村正直『自由の理』、明治政府「学制頒布付仰出書」など、同時代の出来事や文書等との関連を丁寧に指摘している。③福澤自身の著作中における、同じ用語や関連する内容の変遷をこれもきわめて丁寧に述べている。

これに対して、ごく最近出版された後者は、現代語訳が中心だが、各編の大きなまとまりごとに「図解」を付けてあり、内容を視覚的に掴みやすく工夫してある。また、所々に「解説」と「福沢論吉という人」「論語読みの論語知らず」などの「Colum」が配されている。

2) 現代語訳：

出版された現代語訳には、次のようなものがある。

- ①伊藤正雄訳 学問のすすめ－現代語訳 社会思想社 現代教養文庫 1977年

- ②服部陽子訳 学問のすすめ 創栄出版 1998年
- ③檜谷昭彦訳 学問のすすめ 人は学び続けなければならない 三笠書房 2001年
- ④伊藤正雄訳 現代語訳 学問のすすめ 文元社 2004年
- ⑤岬龍一郎訳 学問のすすめ 自分の道を自分で切り開くために PHP出版 2005年
- ⑥ハイブロー武蔵 図解・速習 新訳 学問のすすめ 自分が何をすべきかを知る 日本で初めての成功哲学を読んでみよう 通勤大学文庫 綜合法令出版 2005年

以上6点のうち、④伊藤は①伊藤の復刻版であり、⑥武蔵は「注釈書・解説書」の②武蔵と同じものである。また、①伊藤の訳文は、「注釈書・解説書」の①伊藤『学問のすすめ』講説における訳文を基本に、より読みやすく改訂を加えたものである。

これらの訳業はいずれも貴重なものであり、『学問のすすめ』に対する親しみを増し、その内容を理解する上で大変参考になることは言うまでもない。また、全体として、伊藤注釈書とそれに基づく①伊藤・社会思想社版の翻訳が他の翻訳作業にとってのベースをなしている。

3) これまでの現代語訳における問題点

しかし、③檜谷に見られるように、分かり易さを重視するあまり、本文の範囲を超えた意識、あるいは、出版上の理由によると思われる不正確な訳も見られる。たとえば、福澤の原文に「理のためには『アフリカ』の黒奴にも恐れ入り」(初編)とあるのを「正しい道理であれば、アフリカ発展途上国の住民にも過ちをわび」(檜谷18ページ)としている。これは「ちびくろサンボ」の出版問題などを念頭においた配慮と思われるが、「アフリカ発展途上国の住民」という表現によって、時代的なりアリティが極めて薄くなっている。また、「然るを支那人などの如く、我国より外に国なき如く」(原文)が「しかるに、自国のほかに国はないように考え」(檜谷19ページ)「支那人」に当たる部分が全く脱落している。「支那人」という表現が差別語とされること、またアヘン戦争の評価に関連するトラブルを恐れてのことと思われる。しかし、「支

那」=シナは、「秦」「清」=chin・チン=Chinaであり、それ自体は差別語ではない。この点も含めて、「支那人」に当たる部分の削除は、意識の域を越えている。

全体としては、より正確な訳に近づく方向にはあるが、こうした傾向は、未だ続いている。たとえば、注釈書における伊藤の訳文では、ある種の正確さが期され、「たといアフリカの土人にでも頭を下げようとし」（伊藤注釈書68ページ）、「ところがシナ人などのように」（82ページ）となっているが、2004年の伊藤①社会思想社版④文元社版では、後者が、「ところが中国人などは」と、「シナ人」が「中国人」に変化している。この点、⑥武蔵では、「清の中国人のように」（武蔵13ページ）と後者は適切に処理されている。しかし前者は、「アフリカの未だ発展していない国の人たち」（同）と、当時アフリカの大半がイギリス、フランス、ポルトガル等の植民地で「国家」形成を経験していない地域もあった事実を、視野から落とす結果となっている。

4) 従来の注釈書、現代語訳における時代背景と儒学にかんする解説の脱落と誤訳

①儒学との文献的接続関係への無関心による時代性の希薄化

伊藤の注釈書におけるウェーランド『モラルサイエンス』等との関係についての詳細な解説は、それ以前の福澤研究に対して、文献学的研究水準を飛躍的に高めた。しかし、福澤以前の日本や東アジアにおける学問伝統との関係についての考察については、それ以前の研究水準とあまり変わらずそれへの理解は、ほとんど促されていない。それだけでなく、丸山真男が論点とした日本の「実学」伝統との関係について、一切論及していない。

端的な例は、「初編」冒頭句、「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずといへり」にかんする解説である。これについて伊藤は、木村毅、高木八尺、富田正文らによる、トマス・ジェファソンが起草したアメリカ独立宣言の一節の翻案説を紹介する。しかし、「すべての人は平等に造られ、造物主によって、一定の奪いがたい天賦の権利を付与され、その中に生命・自由、および幸福の追求が含まれる」という一節は、「少なくとも思想としては、ウェーランド『修身論』などにもざらに出てくる」と疑問を呈する。その上で、この冒頭

句が世間に大きなインパクトを与えた要因の一つが、その文体にあったとする。

「単に『すべての人は平等に造られている』と言っただけでは、言葉として平凡であるが、『天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず』と対句にしたので、…上下階級観念が強かった当時の日本人に、より適切な表現となっている…。種はたとい外国種でも、それが非常にうまく日本化されている…。…冒頭の一句は、たまたまそうした福沢の換骨奪胎の技量を端的に象徴したものとして、興味が深い…。」(25-26ページ)

そして「天は」という書き出しに注目して、『学問のすすめ』の前年、明治4(1871)年に中村正直『西国立志編』として出版されたサミュエル・スマイルズ『Self Help』の「Heaven helps those who help themselves」「天は自ら助くるものを助くといへる諺は、確然経験した格言なり」という一節を紹介する。そして、「福沢はこれにヒントを得て、『天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず』という決まり文句を発明して、そこから自分の文章を書き起こしたのではあるまいか」(30ページ)と結論づけている。

しかし、この冒頭句の形式は、当時の士族たちなら誰でも知っていた「四書」の一つ朱子が整理した『中庸』本文の冒頭句、「天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教」「天が人に命じたものを性とと言う、性に率うを道と言う、道を修めるを教えと言う」(宇野哲人全訳注『中庸』講談社学術文庫 48ページ)の換骨奪胎である。また、朱子の執筆による「大学章句序」の第2センテンスの言い換えともとれる。「蓋自天降民、則既莫不与之以仁義礼智之性矣」「蓋し天の生民を降すよりは、則ち既にこれを与うるに仁義礼智の性をもってせざる莫し」(宇野哲人 全訳注『大学』講談社学術文庫11ページ)。この「天」が「命」じあるいは「与」えた「性」は、江戸時代を通じて、君臣の序、長幼の序、男女の別などの上下関係を固定した身分制度だとされてきた。それを、上下関係がないのが「天が人に命じた」「性」すなわち天命の性、天然の性だ、と全く正反対の物として言い換えた。これが、皆に衝撃を与えたのである。「自ら助くる」ことも、天が人に与えた「性」の一つだとは言えるが、これ自体は「修身」として儒学的伝統の中に長くあるので、あまり大きな話題にはならなかったであろう。

こうした明白な照合関係の存在にもかかわらず、『福澤論吉論考』(吉川弘文

館 1969) 以前に「心中天の網島詳解」「小林一茶」「伊勢の文学」等の著書をもつ国文学者・伊藤はなぜか、この「中庸」「大学」との関連には一切注目していない。

同様に、有名な「身も独立し、家も独立し、天下国家も独立すべきなり」(「初編」第2段落最終句)と中国古典との関係にも全く注意が働いていない。この一句が、朱子『大学章句』「経一章」の一節「修身而后齐家、齐家而后治国、治国而后平天下」「身修まって后家斉う、家斉って后国治まる、国治まって后天下平らかなり」(宇野哲人全訳注『大学』講談社学術文庫 37ページ)の言い換えであることは、形式上一目瞭然である。そして、当時の士族で「大学章句序」を知らない者はいなかったと見てよい。しかしこの点についての伊藤の「注」は、明治3年11月起草の「中津留別の書」および同年1月の九鬼隆義宛の書簡に「一身独立して一家独立し、一家独立して一国独立し、一国独立して天下も独立すべきなり。士農工商その独立を妨ぐべからず」とあることを紹介し、「この文章の先蹤といふべき」(48-49ページ)と述べるに止まっている。

②朱子学、儒学の基本コンセプトへの無関心による誤訳

当時の士族が誰でも読んでいた文献との対応関係への不注意は、「学問のすすめ」各編におけるキーワードの解釈に影響を及ぼし、全体の理解、現代語訳の誤りを生んでいる。

そこで、「学問のすすめ」で多用され、論述のキーワードともなっている「天」「学」「知」「道理」「徳義」等、儒学の基本コンセプトを表す用語について見る。すると、伊藤注釈書もほとんどの現代語訳も、これらのコンセプトに全くと言っていいほど頓着せず、さらりと流している。

たとえば、「道理」という語は、『老子』『莊子』のキイコンセプトである「道」を朱子学が取り入れ、朱子学そのもののキイコンセプトである「理」と結びつけたものである。後にも述べるように、『老子』における「道」は、まず宇宙と万物生成の流転の始源である。同時に具体物が具体物として存在し、他のものへと変化し、混沌たる全体に戻っていく、そのような変化の過程でもある(金谷治訳注『老子』講談社学術文庫、金谷訳注『莊子』「内篇」岩波文

庫参照)。これを受け継いで、朱子学における「理」も、このような変化の過程を含む物と物との関係、原因と結果の関係、その誤^{ちが}を指している。つまり、朱子学的な意味での「道理」とは、全体としての宇宙生命から、具体物を具体物として生じ、物と物が互いに関連しながら変化し、全体へと戻っていく過程やその原因、筋道を指す。この筋道は、個別と個別の関係性だけでなく、宇宙全体と個別との関係が、常に意識されている筋道である。そして、福澤がその孫弟子である日出藩の儒学者・帆足萬里の『窮理通』や、萬里がその孫弟子である杵築藩の医師・三浦梅圃の『玄語』などは、この視点を基本に蘭学の試験や実際の観測データ、臨床データをふまえて、宇宙から人体までの「道理」を解明すべく著された書物であった。また、福澤の大阪での師である緒方洪庵の号「適適齋」も『莊子』「大宗師篇」から採られたものだった。したがって、福澤の使う「道理」という語には、こうした、宇宙における万物の生成と変化その筋道と原因、結果の予測等の意味が含まれていたと見ることができる。

これに対して、今日使われている「道理」には、宇宙全体の変化の中における個別の物の変化という視点が希薄である。例えば、『広辞苑』は、「道理【どうり】①物事のそうあるべき理義。すじみち。ことわり。②人の行うべき正しい道。道義。」と説明している。ここには宇宙全体との関係が含まれていない。

したがって、福澤の原文にある「道理」をそのまま「道理」としておいたのでは、現代の読者に福澤が意図した意味を伝えることができない。

しかし、ほぼすべての現代語訳において、「道理」には一切の注がなく、そのまま「道理」としているのが現状である。

例えば、福澤が「学問」の目的・機能が「知識見聞の領分を広くして、物事の道理を弁へ、人たるものの職分を知ることなり」（「二編」の「端書」）としている箇所は次のように訳されている。

伊藤注釈書：「自己の知識や見聞の範囲を広くして、それによって物事の道理を正しく判断する力を養ひ、人間たる者の使命を自覚するのが学問の目的である」（116ページ）

檜谷訳：「知識・見聞を広め、ものの道理を理解し、人間としての責任を自覚することにある」（24ページ）

武蔵訳：「知識や見聞を広くして、物事の道理をよく理解し、人間として世

の中に役に立っていくことをよく知るためにある」(22ページ)

しかし伊藤が、「儒学」という用語をほとんど全く使わず、「儒教」という言葉のみを否定的文脈で使っているように、伊藤注釈書では、福澤を含めて当時の士族たちの学問の基礎となっていた朱子学、儒学がもつ認識論的側面が無視されている。この点は今後修正される必要がある。なぜならば、それを欠いては、福澤が当時伝えようとしたこと、当時の人の受け止め方を理解することが不可能だからである。

4. 現代語訳、語句説明、解説～本稿の目的と作業

以上をふまえ、①先行の注釈や訳業をふまえながら、②先行業績ではほとんど手が着いていない、当時常識となっていた儒学・朱子学との関係を意識して、本稿では③「初編」および「二編」の「端書」について、三つの作業を行った。

その一は、【現代語訳】であり、その二は【解説】であり、その三は【語句】説明である。内容上の正確な理解を期すために、現代語訳では()内に、言葉を補足した。また、とくに【語句】説明を要しない箇所については、省略した。

なお、詳細な理解のために、原文の一文ずつにそくして、以上の作業を行った。そして、「学問のすすめ」全編が「大学」の書き換えであり、その核心が「格物致知窮理」というリテラシー論であることから、段落ごとに、その視点からの簡単な説明を付けた。

5. 「初編」および「二編」の「端書」を読むに当たっての留意点

筆者は、今後引き続いて稿を進め、「学問のすすめ」全体の解説と現代語訳を作ることを期しているが、今回はその第一回として、「初編」と「二編」の「端書」を選んだ。知られているように「学問のすすめ」は当初、後に「初編」とされたものだけだった。しかし、反響の大きさに呼応して「二編」以後「十七編」までが書き継がれ、全十七編の「合本学問之勸」となった。この経過でも明らかなように、「初編」には福澤の意図の基本が凝集されている。そして、「初編」に対する直接的な補足が「二編」の「端書」なので、今回一括して扱うこととした。

1) 失業状態の「士族」がターゲット、そのリテラシーの質的転換を求める

「初編」と「二編」「端書」を読むに当たって、注意すべきことが二つある。

一つは、『学問のすすめ』（初編）の想定していた読者が、中津藩の「士族」だった、ということである。彼らは、中津藩十萬石の「藩士」すなわち江戸時代の地方政府官僚として、200年以上にわたって代々、生計を立て、社会的地位を維持してきた。しかし、明治4（1871）年に廃藩置県が断行され、「秩禄」の廃止、廃城が実施されようとし、「中津藩士」という地方政府官僚の地位と経済生活の基盤を失い、経済的にも社会的にも自立をしなければならなくなった。そのような光景を、後に土井晩翠が「昔の光 今いずこ」と歌った。そして、帆足萬里とともに、その祖父が豊後・日出藩の家老を務めた滝廉太郎が、石垣だけとなった豊後・岡城を眺めながら作曲した。その「荒城の月」が、日本国中で普遍的状況となっていた。

それにもかかわらず、多くの士族は呆然としていたか新政府の官吏になることに腐心するか、読み書きができることから、さしあたって漢学塾や寺子屋を開設するなどで生活を成り立たせようとしていた。しかし、実際には旧中津藩士もまた、新しい人生、新しい職業生活、新しいキャリア形成の方向を探るための視野や見識、知識や技術等を習得し、同時に植民地化の危機にあった日本の社会と国家の創造、再建に有為な人材となることを求められていた。そこでそのニーズを満たすために明治4年に、二千六百石取りの旧家老屋敷を使って開いたのが「中津洋学校」であった。そしてこの中津洋学校で学ぶことを予定している旧士族を中心とする中津の人々に向かって、新時代に必要な「学問」の基本的性格について述べたものが、『学問のすすめ』の「初編」であった。

ここで福澤は、士族であれば誰でも身に着けている基礎的なリテラシーを前提として呼びかけている。士族は、文字や漢文、古文も読める。『大学』『中庸』『論語』『孟子』『易経』『書経』『詩経』などの四書五経を読み、漢詩も作れるし、和歌も作れる。「朱子学」の「実学」「物の理を知る」という発想も知っている。だが、基礎的なリテラシーや漢詩和歌だけでは不十分であり、漢籍を聖典として扱う必要もない。基礎的なリテラシーや「実学」「理」を新時代に合うものとして、「人間普通日用に近き実学」として展開する必要があると、強調した。そして、そのためには、『中庸』冒頭句が言う、天が人に命じた「性」

については、君臣秩序ではなく「人は同等」と解されるべきだと、述べた。

「初編」を読むときには、この点への留意が必要である。この点を見失うと「福澤は『文学』は不必要だと述べていた」、というように断片だけにこだわる傾向を生ずる。それはとりもなおさず、文の真意が読み取れない、ことを意味する。

2) 朱子学的用語とくに「道」「理」と「学」「知」との関係理解

もう一つの留意点は、朱子学的用語とくに「道理」と「学」「知」との関係理解である。

『学問のすすめ』全編の主題は、「理を知る」こと、そのために「修身齐家治国平天下」をリテラシー論的視点から書き換える「学問」の展開を呼びかけることである。

①「物」の存在や変化、および「気」と物の循環としての「道」との原因としての「理」

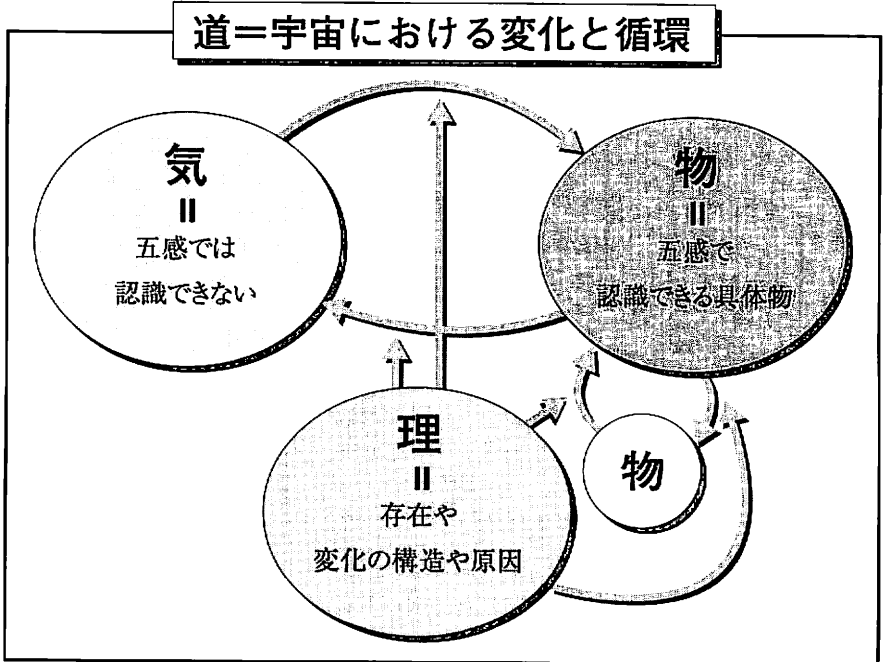
ここで言われる「理」とは、北宋の程顥・程頤兄弟などが問題提起し、南宋の朱子（朱熹）が集大成したとされる「宋学」とも呼ばれる「朱子学」の中心概念であり、「変化」が生じるわけ（訳）、理由、である。

一般に朱子学は、儒学と老荘思想と仏教との三者を結びつけることにより、①生々流転しながらも一つの統一された世・生命体である宇宙の変化の法則、②その変化の中における生と死、人生の意味、③人と人がきちんと向き合った社会とその社会秩序のあり方、そして④これらの世界を認識する方法について探求したもの、といえる。すなわち、「仁」の貫かれる世の中を作ろうとし、そのために必要な「学」や「知」を重んずる『論語』『孟子』の孔子・孟子に基礎をおき、多分に「夏」＝中原、中華や「中国」「帝国」を重んずる儒学の世俗主義を基盤としている。同時に、『莊子』『老子』の老荘思想からは、人間が大自然の命の一部であること、万物が連関を持ちながら変化し、循環している「道」を強調する自然主義的傾向や、領土だけが広い「帝国」よりも質の高い「小国」「寡民」を重視する考えを取り入れている。さらに、仏教からは、万物が流転する「無」「空」と「色」との循環を悟ることの中に人間の性と死

の意味を見いだそうとする思想を、取り入れている。

このような朱子学にあつては、混沌たるカオスもしくは万物の根元的・一般的存在状況として「気」を想定する。この気に変化して「物」になる。この「物」は人や動物・植物・鉱物・大地などの、あらゆる種類の具体物である。この物は、時間の経過の中で変化し、別の物に、さらには「気」へと帰っていく。すべての「物」にその固有性を与える「元気」が内在する。「気」を発する「発気」によって、それぞれの具体的な物ははつらつとしよう。この「気」と「物」の循環において、ある「物」から別の「物」への変化過程において、循環や変化を生じさせる原因が「理」である(図1)。

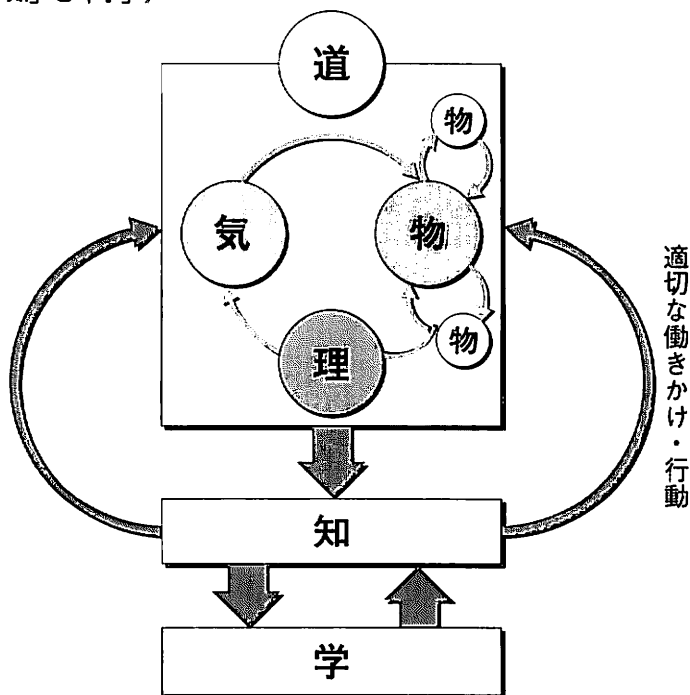
図1 〈「道」と「理」〉



② 「知」が上位、「学」は下位

したがって、この「理」を知ることができれば、変化や循環を予測することが可能となる。また、現実の変化の過程により適合的に行動することができる。この「理」を探求し、「理」を極める行為が「知」である。したがって、『論語』の世界においても、朱子学の世界においても、人間の認識活動においては「知」が最も重要なものである。そしてこの「理」を「知」る過程において、権威あるもしくは定評のある、評価の定まった書物を読んだり先生の話の聞いたりすることが「学」である。要するに、「知」が「学」の上位にあり、「学」は「知」の下位に、その手段としてある（図2）。

図2 〈「知」と「学」〉



③ 「窮理」の過程としての「学問」と「窮理」による「行状」＝行為の適切化
『論語』では必ずしも明確にならなかった「物」と「気」と「理」、これ

らと「知」との関係性を明確にするために、朱子らは『大学』における「致知在格物」「知を致すは物に格るに在り」(前掲宇野『大学』35ページ)という叙述に注目した。具体的な物に取り組んでこそ「知」という認識作用が十分機能する、という意味である。

そこで朱子は失われたとされる「伝五章」の復元を試みるとして、「格物致知」に「窮理」を補足して「格物致知窮理」というフレーズを作った。

「所謂致知在格物者、言欲我之知、在即物而窮其理也。蓋人心之靈、莫不有知。而天下之物、莫不有理。惟於理有未窮。故其知有不盡也。是以大学始教、必使学者、既凡天下之物、莫不因其已知之理、而益々窮之、以求至乎其極。」

「所謂知を致すは物に格るに在りとは、私の知を致さんと欲せば、物に即いてその理を窮むるに在るを言うなり。蓋し人心の靈、知あらざる莫し。而して天下の物、理あらざる莫し。唯理において未だ窮めざるあり、故にその知尽くさざるあるなり。是をもって大学の始教は、必ず学者をして凡そ天下の物に即きて、その已に知るの理によって益々これを窮め、もってその極に至らんことを求めざる莫からしむ。」

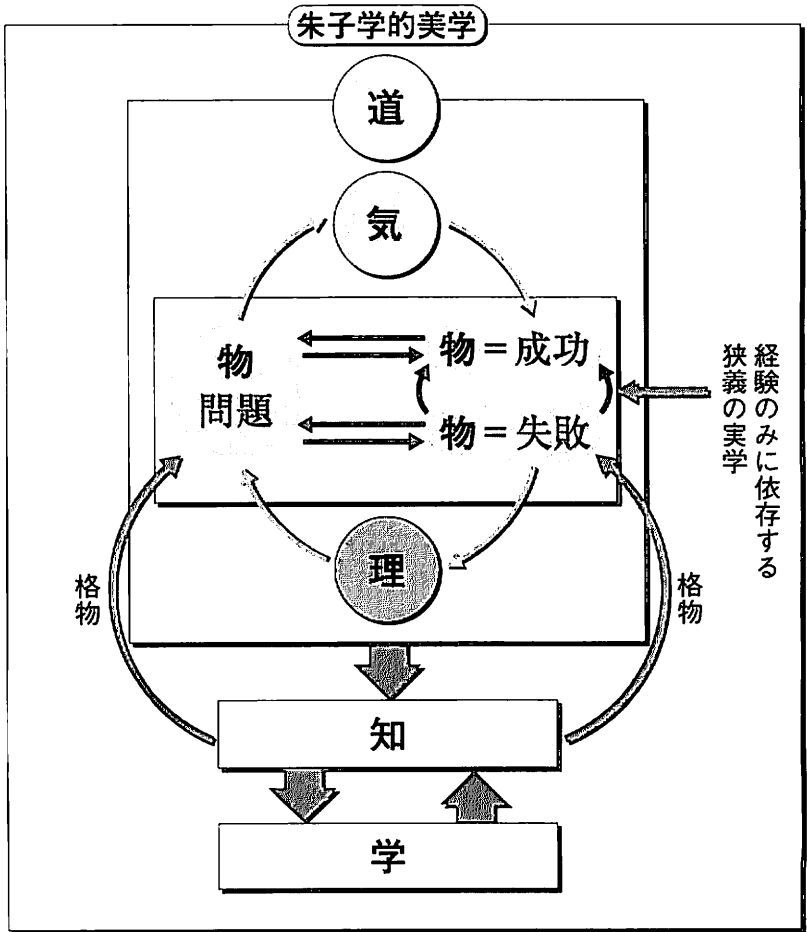
この「格物致知窮理」は、「儒学」の文脈では、次の6点をふくんでいる。

- ① 気の現象形態としての具体的な物の存在や変化としての「物」に取り組む。
- ② これによって、具体的な空間と時間における「物」の存在や変化とその原因を尋ねる行為、認識作用としての「知」が機能する。
- ③ このような、一つ一つの具体的な物に即し、一つ一つの具体的な物について「知」を働かせることによって、次第、次第に「理」が「窮」まる。
- ④ このような認識過程は、人間世界や地上の事柄だけでなく、大自然としての宇宙もふくめ、すべての物と気について行われる。
- ⑤ 書物を読み、先生の話聞く行為としての「学」は、この認識過程における重要で不可欠な手段ではあるが、あくまでも一手段であって、その全体ではない。
- ⑥ 「理」の認識によって、人の行為、「行状」、行動がより、人間らしい適切なものとなっていくこと。

朱子学的伝統及びそれをふまえた福澤の「人間普通日用に近き実学」とは、こうした「理」を含んだものであって、たんなる日常生活技法に止まるものではない。今日「実学」とされるものが往々にして「知識の陳腐化」の喧伝と表裏一体になっているが、それはそこで言われる「実学」「知識」なるものが、

「理」や「学」を含まないために生じている混乱である。(図3)。

図3 《朱子学的「実学」と通俗的「実学」》



3) 「学」の硬直化と蘭学・洋学との融合による柔軟で実証的な展開

日本への朱子学の入り方や伝播の仕方によって、福澤が「腐儒」と批判したような、身分制に固執する硬直化した朱子学理解が色濃くあったのも、事実である。

一般に朱子学には、①人間社会の秩序に注目し、とくに「君臣」「長幼」の序等の上下の序列関係を強調し、それを天然の「理」の結果だとする要素と、②人間が自然の循環の中にある存在だという点をふまえて「格物致知窮理」=物に即しながら自然や人間を探求する認識論の要素がある。日本への朱子学の導入は古く鎌倉時代にさかのぼることができるが、江戸時代に徳川家康の支持を得て林羅山らが広めたものは、「儒教」を「国教」とする朝鮮王朝の李退溪(今日韓国の1000ウォン札に肖像が描かれている)らによって展開された君臣秩序を重んじる解釈に依っていた。これは江戸時代を通じて幕府の正統な学問とされ、これ以外の儒学古典の解釈等は「異学の禁」などとして、しばしば抑圧されるところとなった。

これに対して、九州各地を始めとする諸藩、あるいは京都、大阪、長崎などの大都市における町人を基盤とする儒学研究では、様相が異なっていた。これらの地域では、地方分権の経済システムの下での各地の特産物形成、長崎の明清貿易やオランダ貿易、「蘭学」を窓口とする西欧実証科学などとの交流、幕末の藩財政の逼迫を背景とする藩政改革などによって、朱子学は、より認識論に傾斜した「窮理学」として受容され展開した。その典型が既に述べた、豊後の三浦梅園や帆足万里などの著作であった。もちろん、九州各藩といえども幕藩体制の中に位置している以上、君臣秩序を無視することはできなかった。「帆足万里ほどの大儒でも道德となると五常五輪から抜けることができなかつた」と福澤は批判していた。しかし、君臣秩序のみに傾斜していなかつた中津藩をふくめた豊後・豊前、九州各地や緒方洪庵らの漢学研究の伝統もあり、「『物理』の客観的独立性を確保」という「『実学』の転回」(丸山真男「福沢諭吉における『実学』の転回」丸山「福沢諭吉の哲学」岩波文庫53ページ)は、福沢以前に梅園や万里によって既に達成されていた。

今これを「格物致知窮理」派とあえて名づけるとすれば、福澤はこの「格物致知窮理」派の人脈に属していた。そして、万里らが破れなかつた「天命の性」=君臣秩序論をも書き換えることを含めて、「格物致知窮理」という東アジアの学問の基本精神を、彼自身の長崎、大阪、アメリカ、西欧体験をふまえ、新時代にそくして中津の人々に伝えようとしたのが、『学問のすすめ』「初編」といえる(表1)。

表1 〈日本朱子学における人間、自然、学問論の変化〉

朱子学			
	人間世界の秩序	自然世界の秩序	学問論
李退溪 林羅山	君臣秩序 長幼の序 男女の別	自然秩序と 人間秩序の融合	抽象的 理・気論
三浦梅園 帆足萬里ら	同上	天体～人体は 人間の意志から独立	格物致知窮理学 蘭学との接続 解剖学・医学
福沢諭吉	人は同等 独立自尊 一身独立して 一国独立す	天体～人体の独立 をふまえた 人間秩序の再構築と 融合	格物致知窮理学 蘭学・英米仏学との接続 実業・実学論 モラルサイエンス

6. 「学問のすすめ」本文、現代語訳、解説および語句

1) 「初編」第1段落：人の貧富の原因は学と不学

第一段落は14の文から成り立つ。

福澤はここで、人の同等、「学」「智」「仕事」「貴」「富」という、現代人も気になるキーワードを提出する。その論理は次のようなものである。人は生まれながらに平等だが、複雑な仕事をする人は富み、簡単な仕事しかできない人は貧しくなる。複雑な仕事をするためには、「智」が必要だが、「智」には「学」ぶことが、欠かせない。図式化すれば、〈「学ぶ」もの→「智」者→複雑な「仕事」・貴い「仕事」ができる人→貴く「富」む、「富貴」の人〉となる。反対に、〈「学」ばない者→「智」のない者→簡単な「仕事」しかできない人→貧しい人〉となる。

1. 【本文】天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと言えり。

【現代語訳】（宇宙の「気」と「物」の変化や循環を統括している）「天」は、人を造るに当たって、人の上に人を造ったことはなく、人の下に人を造ったこ

ともない(すべての人は平等に造られた)と、すでに人々によって宣言された。**【解説】**従来の研究書では殆ど触れられていないが、形式的には、この文は、「中庸」冒頭句「天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教」「天が人に命じたものを性と云う、性に率うを道と云う、道を修めるを教えと云う」の再解釈である。江戸時代260年を通じて、天が人に命じた「性」は「君臣秩序」「長幼の序」「男女の別」と理解され、人に上下があることは常識とされてきた。しかし福澤はここで、人が平等であることが天然の「性」だということである。江戸時代の人間秩序観念に対する正面からの挑戦である。「士族」を始め、当時、書物を読む人であれば誰もが読み講義を受けたことがある「中庸」を換骨奪胎した点に、「学問のすすめ」が世間に衝撃を与えた一つの理由がある。内容的に見れば、福澤がこうした点について突き詰めて考え表現し始めたのは、第二回訪米の帰国に関連して、幕府から一方的謹慎処分を受けたことがきっかけであった。伊藤正雄の注釈書『『学問のすすめ』講説』が言うように、アメリカ独立宣言やスマイルズ『Self Help』を色濃く反映している。この冒頭句は、また、「帆足萬里ほどの大儒でも道徳となると五倫五常になってしまう」と尊敬する故郷の先学を批判していた福澤が、社会道徳と学問の改革を自らの役割と自覚したことを、人々に宣言したもの、ともいえる

【語句】☆天=朱子学的世界観における、宇宙全体を統括している、意志を持った存在。☆人=伝統的な儒学においては、統治側に属する人間を指す。これに対して被統治側に属する人間は「民」とされた。この両者を併せて「人民」という言葉が、peopleの訳語として明治になって造られた。☆造らず=儒学的考えでは、人は天によって造られるのではなく、自然的世界の循環の中で生じるとされる。これに対して、「旧約聖書創世記」は、「神」が人を造ったとする。☆言えり=言へり。「言ふ」の已然形「言へ」に完了の助動詞「り」が付いたもの。すでに、言われた。言われてきた、の意味。

2. **【本文】**されば天より人を生ずるには、万人は万人皆同じくらいにして、生まれながら貴賤上下の差別なく、万物の靈たる身と心の働きをもって天地の間にあるよろずのものを資り、もって衣食住の用を達し、自由自在、互いに人の妨げをなさずして各々安楽にこの世を渡らしめ給うの趣意なり。

【現代語訳】したがって、天から人が生まれたときには、全ての人は全て同じ地位であった。人には、生まれながらにして、貴いとか賤しいとか、上とか下とかの区別は無い。全ての生物の頂点に立つものとしての身体と心の働きによって、この世界にある様々な物を取り入れて、衣食住の必要を充たす。自分自身の中にある必然性にそくして自分自身の存在に意味を持たせ、互いに他の人の妨げにならないことを前提に、それぞれの人が安定して楽しく、この人生を過ごさせて下さる。先の文は、そのような意味である。

【解説】「大学章句序」の第2センテンス「蓋自天降生民、即既莫不与之以仁義礼智之性矣」の言い換え。福澤は、大阪の緒方洪庵の「適塾」で医学を視野に入れた自然科学を学び、故郷の豊前豊後の先学、帆足萬里の『窮理通』は、儒学と蘭学をふまえて、宇宙論から生物論、人体論まで詳細に述べていた。その福澤は、人間も自然物の一部だという考えを持ち、虫けらの命も人の命も命としては同等だが、虫には虫の「職分」があり、人には人の「職分」があると考えていたので、自然物としての人は平等だと考えていた。また、遠山茂樹が『福沢諭吉』（東京大学出版会）で指摘するように、第二回目のアメリカ行きの帰りの船中でのトラブルが原因で一方的謹慎処分を受けた福澤は、「人権」「人の権理」に強い関心を持ち、『西洋事情・二編』ですでに人の自由は拘束できないことを強調していた。

【語句】☆されば=さ・あれば=さ+あるの已然形。そのようだから。☆万人=よろずの人。すべての人。「天」という絶対的な者の下では、「人」と「民」との分裂が生じていない。☆同じくらい=人としての同じ位置、価値。位=階位、職位等の人の上下を指す。☆万物の靈=「氣」の発現としてのよろずの「物」のなかで、最も洗練された、最も高い点に到達しているもの。伊藤は「惟天地万物父母、人万物靈」（『書経』）と指摘。☆天地の間=「天」がコントロール機能を持っているのに対して、「地」は具体的展開をする世界。世界中の。☆自由自在=自分自身の中に「理由」すなわち自立的な運動メカニズムをもち、他のコントロールを受けることなく自分自身で存在する。☆安楽=安らかで楽しいこと。☆この世を渡らしめ給う=この世で人としての生活をするように、おさせになる。

3. 【本文】されども今広くこの人間世界を見渡すに、かしこきひとあり、おろかなるいとあり、貧しきもあり、富めるもあり、貴人もあり、下人も

ありて、その有様は雲と泥との相違あるに似たるは何ぞや。

【現代語訳】 そうではあるが、今、広く人間の世界を見渡してみると、賢い人もいるし愚かな人もいる。金銭や物について貧しい人も、豊かな人もいる。身分の高い人も低い人もいて、その有様には雲泥の差があるのはなぜか？

【解説】 人間が始源において平等なのに、現実の人間の状態には賢愚、貧富の差があるとし、その違いがどこからきたのかと、問うている。中心的キーワードの一つ「学ぶ」ことの有無が、具体的な人間の有り様のちがいの主要因とする、福澤の自説への伏線が張られている。また、「大学章句序」の「然れどもその気質の稟、或いは斉しき能わず」を意識している。

【語句】 ☆されども：さ・あれども＝そうではあるが。けれども。☆人間世界：「人間」人が集まって成立する「世界」。☆雲と泥との相違：雲泥の差、極端に異なること。

4. 【本文】 その次第甚だ明らかなり。

【現代語訳】 どうしてそのような違いができたのか、その訳は明瞭である。

5. 【本文】 実語教に、人学ばざれば智なし、智なき者は愚人なりとあり。

【現代語訳】 (寺子屋での教材で、誰もが知っている)【実語教】に、人は学ばないと知恵が生まれず、知恵がない人は愚かな人だ、と記されている。

【解説】 「学」「智」という二つのキーワードが登場している。「智」が「学」よりもより重要だとされ、「学」は「智」の手段とされていることが注目される。〈「学」→「智」→「賢」「愚」の別〉という図式になっている。

【語句】 寺子屋教材の一つである実語教には「玉不磨無光…人不学無智、無智為愚人」とある。「學」の字は子どもが建物の中に入っているという形(「字通」)からきているが、「論語」では、権威ある先生の話を聞いたり書物を読むことが「學」であり、ここには、自分で観察、実験するなどの行為は含まれない。したがって、「学」は権威主義に陥ると硬直化し、「智」に至らない危険性をはらんでいる。「學」の効用は、文字や言葉を媒介として様々な情報、事実関係、異なった見解などを知ることにより、多様で柔軟な見方を可能にする点にある。「仁を好みて、学を好まざれば、その蔽や愚。知を好みて学を好まざれば、その蔽や蕩。信を好みて学を好まざれば、その蔽や賊。直を好みて学を好まざれば、その蔽や絞。勇を好みて学を好まざれば、その蔽や乱。剛を好みて学を好まざれば、その蔽や狂」(「論語」陽貨篇、

岩波文庫(241ページ)とある。実語教の出典と考えられる。なお、日本語では「まねる・まねぶ・まなぶ=学ぶ」とされ、たんに先生の話を聞いたり本を読むこと以外に、人が行っている技を観察し習得する意味が含まれている。☆智：物事の存在や変化等の訳や因果関係を認識し、ことに応じ、必要に応じて、適切な判断を下す能力。存在や因果関係等を認識する過程が「知」である。

6. 【本文】されば賢人と愚人との別は、学ぶと学ばざるとに由って出来たるものなり。

【現代語訳】だから、賢い人と愚かな人との違いは、その人が学んだか学ばなかったかという違いが原因となって、生じたものである

【解説】「論語」は、「学」を欠くと「愚」になるとは言っているが、「学」のみで「賢」になるとは言っていない。そこで宋学=理学=朱子学では、「大学の始教は…凡そ天下の物に即きて、その已に知るの理によって益々これを窮め、もってその極に至らん」と、すでにわかっている事柄を活用しながら、あらゆる物に関し、実際の状況に即しながら、存在や変化の訳である「理」を「窮めることと、「知」を介在させた「大学」を提起している。このような、朱子学的な「学」の視点に立てば、「学」が「賢」「愚」を分けるという立論は成立する。

7. 【本文】また世の中にむつかしき仕事もあり、やすき仕事もあり。

【現代語訳】また、世の中には難しい仕事もあるし、易しい仕事もある。

【解説】第10文における、人の貴さは「働き」の貴さに依存するという、身分制から能力性・実績主義への転換、それによる人間社会の活性化という主張に向けて、伏線を張っている。

【語句】☆仕事：「事」に仕えること。物事の性質に即して、物に働きかけ、人にとって意味のある結果を導き出す行為。経済生活を成り立たせるための「生業・なりわい」とは重なり合いを持ちながらも、イコールではない。「仕事」の方が「生業」よりも広い。

8. 【本文】そのむつかしき仕事をする者を身分重き人と名づけ、やすき仕事をする者を身分軽き人という。

【現代語訳】 そのように分類した内で、難しい仕事をする者を身分が重い人、易しい仕事をする者を身分が軽い人という。

【解説】 「身分」のコンセプトを、固定的、世襲的なものから、その人の「仕事」に即したものと転換させている。

【語句】 ☆身分：身に即した、社会の中での役割分担。

9. 【本文】 すべて心を用い心配する仕事はむつかしくて、手足を用いる力役はやすし。

【現代語訳】 どういう仕事でも、精神的な働きを多く伴ってあれこれと多方面に渡って配慮や調整をする仕事は難しく、精神的働きをあまり多く伴わないような、手足を使うだけの力仕事は容易である。

【語句】 ☆心配：状況の複雑さに応じて、心配りをすること。今日の「心配」とは違って、ネガティブなニュアンスは含まれていない。

10. 【本文】 故に、医者、学者、政府の役人、または大なる商売をする町人、夥多の奉公人を召使う大百姓などは、身分重くして貴き者というべし。

【現代語訳】 だから、医者、学者、政府の役人、また、規模の大きな商売をする人、たくさんの使用人を使う規模の大きな農業経営者などは、身分が重く、貴い者だと、言うべきである。

【語句】 ☆大百姓：規模の大きい農業事業者。「百姓」は元々、様々な技能を持ち、そのそれぞれを生業としていた諸民の全体を意味する言葉であり、今日の中国語圏でもそのような意味で使われている。しかし日本では、江戸時代には、「百姓」=農民というように、意味が変化していた。

11. 【本文】 身分重くして貴ければ、自ずからその家も富んで、下々の者より見れば及ぶべからざるようなれども、その本を尋ねればただその人に学問の力あるとなきとに由ってその相違も出来たるのみにて、天より定めたる約束にあらず。

【現代語訳】 身分が重く、皆から重要だとされれば、自然にその人の家も経済的に豊かになって、下々の人から見れば、とても及ぶことはできないように見

える。しかし、根本的に考えてみると、ただその人に学問の力があるかないかということが、その原因であるにすぎない。決して天が定めた約束ではない。

【解説】江戸時代には不動のように思われた身分制度が、「天より定めた」宿命なものではないこと、および、経済的分水嶺が「格物致知窮理」精神に基づく「学問」とその結果生まれる「知」にあることを強調している。

【語句】☆及ぶべからざるよう：及ぶことは有り得ないよう☆その本を尋ねれば：この表現は『世界国盡』にも登場するが、「物に本末あり、事に終始あり、先後する所を知れば則ち道に近し」（宇野『大学』33ページ）を前提としている。

12. 【本文】 諺に云わく、天は富貴を人に与えずしてこれをその人の働きに与えるものなりと。

【現代語訳】 天は富貴を人に与えるということはなく、富貴をその人の働きに応じて与える、とは諺にもある通りである。

13. 【本文】 されば前にも言える通り、人は生まれながらにして貴賤富貴の別なし。

【現代語訳】 だから、既に述べたように、それぞれの人の貴賤富貴の違いは、生まれながらにして決定づけられているのではない。

14. 【本文】 ただ学問を勤めて物事をよく知る者は貴人となり富人となり、無学なる者は貧人となり下人となるなり。

【現代語訳】 ただし、学問に真剣に取り組んで、物事をよく知る者は貴人、富人となる。反対に、学問に真剣に取り組まず、物事をよく知らない者は貧しい者、地位の低い者となる。

【解説】 学問は「物事をよく知る」ための手段とされていることに注意。その場合の「物事」は、個別具体物の存在だけでなく、宇宙の変化、人間社会の変化等を含むものである。「知る」とは、理解し必要に応じて活用できる「智」を蓄積する行為でもある。

2) 「初編」第2段落：「窮理」をふくむ「人間普通日用に近き実学」が

人の独立、家の繁栄、国家の独立、世界の平和をもたらす

第1段落で「学ぶ」ことの重要性を提起した福澤は、第2段落で「学ぶ」こと、「学問」「実学」のリテラシー論的分析を行っている。ここでは直接的経済活動をしないう士の教養と経済的自立が必要な人々が必要とする教養とのズレがクローズアップされている。また「実学」には「一科一学」の集合体としての学問が不可欠とされている点も注目される。

1. 【本文】学問とは、ただむつかしき字を知り、解し難き古文を読み、和歌を楽しみ、詩を作るなど、世上に実のなき文学を言うにあらず。

【現代語訳】「学問」というのは、たんに、難しい字を覚えたり、解釈がひどく困難な中国や日本の古典を読んだり、和歌を楽しんだり、漢詩を作るなど、(武士ではなくなりこれから自分で経済生活を成り立たせていかなければならない士族にとって)世を渡っていく上で実際上の関わりが小さい、書物を系統的に学ぶことだけ、を指すのではない。

【解説】当初想定された『学問のすすめ』の読者、すなわち中津洋学校の学生たちの大半は旧士族であり、残りは上層の町人であった。彼らはすでに、「四書」「五経」等の中国古典や『古事記』等の日本の古典を読んでおり、和歌や漢詩を鑑賞し自ら作る能力を持っていた。このことを前提に、福澤は、こうしたことだけが「学問」ではない、と断言している。しかし、これらが学問ではないとは言っていない。つまり、全否定ではなく部分否定であることに注意が必要である。また、「文学—今いふ文学より範囲が広く、文章を読んだり書いたりすることを主にした学問を総称している。これは福澤のみならず、当時一般にさういふ意味に用いた」と伊藤注釈書も指摘するように(46ページ)「文学」とは当時、文字で著された書物等の「文」を「学」ぶことを指しており、文芸のみを指すのではない。

【語句】☆むつかしき字：中国古典や漢詩を読み書きするのに必要な画数の多い漢字。☆解し難き古文：『論語』等に関して漢代の注釈と宋代の朱子の注とでは解釈が大きく異なるなど、多くの注釈書が出され、解釈をめぐる大論争になってきた状況を意識していると考えられる。☆詩：「漢詩」。詩は基礎科目を指す「六芸」の一つにも挙げられており、和歌も、漢詩も江戸時代を通じて武士の基本的教養であった。福澤自身も漢詩を多く作っている。☆

世上に実無き：旧士族が今後の経済生活を成り立たせていく上で実際上の関わりが少ないこと。

2. 【本文】 これらの文学も自ずから人の心を悦ばしめ、随分調法なるものなれども、古来世間の儒者和学者などの申すよう、さまであがめ貴むべきものにあらず。

【現代語訳】 中国や日本の古典、漢詩や和歌などの書物について学ぶことも、人の心に悦びを与えたりするので、なかなか意味がある。しかし、(孔子を「聖人」視し、『論語』『古事記』などを「聖典」と絶対視するなど)昔から世間の儒学者や和学者などが言うように、神聖視するべきものではない。

【解説】 「聖典」や「聖人」を相対化し、その固定的な呪縛から解放されるべきだと強調しており、古典や文芸を全否定しているのではない。しかし、「福澤は文学はいらなと言った」という俗説がはびこった。このため、晩年、慶應義塾の基本方針として書かれた「修身要領」では、「文芸の嗜は人の品性を高くし…社会の平和…人生の幸福を増す…人間要務の一なり」『福沢論吉全集』第21巻355ページと、文芸としての「文学」の重要性を強調した。また、日本は中国大陸や朝鮮半島から見て辺境の地であり、科擧がなかったために、『論語』や朱子の著作を絶対視する程度は低かった。それ故に、「父母にもらった身体は傷つけてはならない」という『論語』の一節にもかかわらず、幕府や各藩公認で人体解剖する事ができた。これが江戸時代後期の日本の学問、実学を飛躍的に発展させた。この点を福澤も高く評価していた。

【語句】 ☆調法：方法を調える。便利である。

3. 【本文】 古来漢学者に世帯持の上手なる者も少なく、和歌をよくして商売に巧者なる町人も稀なり。

【現代語訳】 昔から、漢学者で所帯の切り盛りが上手なものは少なく、和歌を得意としながら商売に長けている町人も稀である。

【解説】 士族がこれからの経済生活の見通しを立てるには、漢学や和歌だけでは不十分だと強調している。これ以後、他人の経済活動に依存してきた武士の教養としての「学問」と、自ら経済生活を成り立たせてきた「町人百姓」すな

わち、農工商の人々にとって求められる学問とのズレが強調されていく。

【語句】☆漢学者：漢籍に精通した学者。☆和歌をよくして：和歌が上手・得意で。

4. 【本文】これがため心ある町人百姓は、その子の学問に出精するを見て、やがて身代を持ち崩すならんとて親心に心配する者あり。

【現代語訳】この理由から、(自らの経済生活を自分の労働で成り立たせることをすでに実践している)農民や職人、商人たちで、正常な判断力を持ったは、自分の子が(自ら経済生活を成り立たせることを日々行ってこなかった武士にとっての教養としての)学問に精を出すのを見ると、そのうちに家業を潰してしまうだろうと、親心に心配する者がある。

【語句】☆身代を持ち崩す：家業がうまくいかなくなる。財産を失う。

5. 【本文】無理ならぬことなり。

【現代語訳】(経済活動を行ってきた農工商の人々と、基本的には農工商の経済活動に依存し、消費を主としてきた武士の教養とがずれているのだから、農工商の人々にとっての)この心配は、物事の変化の法則にかなっている。

【語句】☆無理：「理」=変化の法則に合致していない。

6. 【本文】畢竟その学問の実に遠くして日用の間に合わぬ証拠なり。

【現代語訳】こういう心配が広く生まれるのは、詰まるところ、漢学や和歌などに限定した(武士にとっての)「学問」なるものが、(経済活動を行っている農工商の人々の)現実の生活から遠く離れていて、(農工商の人々にとっての)日常生活の維持や改善に役立たないからである。

【語句】☆畢竟：結局のところ。要するに。「畢」も「竟」も終わりの意味。

7. 【本文】されば今かかる実なき学問は先ず次にし、専ら勤むべきは人間普通日用に近き実学なり。

【現代語訳】だから、(自分自身の経済生活の見通しを立てねばならないという、現在の士族のおかれた状態を考えた場合)そのような実際の(経済)生活に役立たない学問は今の議論からは外して、今先ず集中すべき学問は、人間なら

ば誰にでも必要とされる、日常生活に広く役立つ「実学」である。

【解説】ここで、この段落の積極的テーマの「人間普通日用に近き実学」が登場する。ここで福澤は、統治階級としての「人」、被統治階級としての「民」という視点をとっていない。自ら経済活動を成り立たせることを基礎に生活全般を築くという意味で、「士族」にも「平民」にも共通する「人間」の視点から、学問についての論述を進める。「日用に近き実学」とは、日常生活に近いところから世界の全体をとらえる学問という意味である。古く『論語』に「下学して上達す」＝「身近な事を学んで高遠なことに通じていく」（憲問篇、岩波文庫版203ページ）とある。また朱子が編集した『中庸』は、その冒頭句で、「中庸」という書物全体が「皆実学なり」としている。そのさい「始めは一理を言い、中は散じて万事と為し、末は復合して一理と為す」（宇野『中庸』43ページ）と、全体の中での個別、個別を含んだ全体という視点が基本だ、とする。福澤の『学問のすすめ』も、「天は…」という一理から説きおこし、中で、各論を展開し、最後に、「余輩の勤むる学問の専らこの一事をもって趣旨とせり」と天然の性である「自由不羈」を一身、一家、一国、全世界に貫くという「一理」で結んでいる。朱子が執筆した「大学章句序」も、伝説上の黄帝などの聖人の時代には、村里に至るまでも学校があり、人が生まれて八歳になれば王公から庶民の子にまで皆「小学」に入ったとする。そして「これに教えるに洒掃（そうじ）応対進退の節（挨拶や礼儀）、礼楽射御書数の文をもってす。」「すべて人民の生活上日々に用うべき一定不易の人倫の道の外に出でない」（『大学』講談社学術文庫 17-18ページ）と述べている。福澤は、『大学』のこの部分を換骨奪胎し現代化しようと思図している。朱子学研究者である市川安司は、こうした点を指摘し、朱子の夥しい「著述の根底を流れる共通の考えは、実学についてのそれであり、…常に生活への反省を伴うもの」で、その「実学」からは、「日常生活に生かすことを究極の目的とし、生活から外れたものは、排除される」と述べている。（市川安司『朱子－学問とその展開』評論社1974年 30-31ページ）。

【語句】☆普通：普く通じること。現代語でいえば「共通」という意味。現代語の「普通」＝平均的とは、意味が異なる点に注意。

8. 【本文】 譬えば、いろは四十七文字を習い、手紙の文言、帳合の仕方、算盤の稽古、天秤の取り扱い等を心得、なおまた進んで学ぶべき箇条は甚だ多し。

【現代語訳】 例として、いろは四十七文字を習い、手紙の書き方、帳簿の付け方、算盤の練習、天秤ばかりの取り扱い方の基本を習得するなど、読み書き計算の基礎や、日常生活の機会や器械と結びついた実際の作業などが挙げられる。が、これに止まらず、さらに進んで学ぶべきことは非常に多い。

【解説】 これも、「大学章句序」の次の一節を換骨奪胎したもの。「子弟を教育する方法の次第順序より、こまごまとした箇条の詳かなることかくのごとくにして」（前掲「大学」18ページ）とあるが、福澤は「教育の方法の次第順序」「こまごまとした箇条の詳かなる」ものの例を提案している。福澤がいう「実学」が初歩的リテラシーに止まらず、「進んで学ぶべき箇条多し」と中上級コースを設定していることに注目。そしてそれは「大学章句序」の「十五歳に達すると…大学に入学して、これに教えるに理を窮め心を正しくし己を修め人を修めるゆえんの道をもってする」（17ページ）と対応している。

なお、「文字之教」「啓蒙手習之文」などで、福澤は、こうした教育内容をすでに公刊し、世に提案していた。

9. 【本文】 地理学とは日本国中は勿論世界万国の風土案内なり。

【現代語訳】 「地理学」とは日本国中はもちろん、世界の様々な国々の気候や産業、生活習慣などへの誘いである。

【解説】 ここから、実学の重要な構成部分である「理学」についての提案が始まる。地「理学」であり、自然物としての万物について「理」を求める教義の「窮理学」としての「究理学」、万国古今の有様を詮索し年代によるその変遷とその訳をの「詮索」＝窮理する「歴史」であり、一身一家から国家天下までのものの生産や流通、消費、財務などの「理」を窮める経済学、人として生きていく上で前提となる「天然の道理」を理解し、自らのこう道の適正化を図る修身学等である。

10. 究理学とは天地万物の性質を見てその働きを知る学問なり。

【現代語訳】「究理学」（「窮理学」）というのは、宇宙、天体から人体に至るまで様々な物の性質を観察して、全体やその中での個々の運動、機能を知る学問である。

【解説】福澤は「究理学」「窮理学」という言葉を朱子学と蘭学、英米学等をふまえた、実学であり、理を窮める「サイヤンス」でもある学問の総称として用いた。他方、帆足萬里の『窮理通』のように、天体学、力学、解剖学等、人間の意識とは直接的には無関係の、今日いう自然科学、さらには狭義の物理学の意味で使うこともあった。前者の場合、『老子』の「天地自然のはたらきは、慈愛に満ちた仁の徳を行っているようにみえる。しかし、そのはたらきは仁の徳などに縛られたものではない。それを越えた、非常な、自然無心なはたらきである」（前掲金谷『老子』29ページ）等の叙述が念頭にあったと考えられる。江戸時代に生涯を終えた帆足萬里等が、時代の制約からできなかった、広義の窮理学を、自らの手で実現しようとして、天文学、力学、医学以外に、「モラルサイヤンス」等、人間の生活に直結する部分に力を入れたと理解される。日出藩の家老でもあった萬里には、客観的にも主観的にも、人は平等という「天命＝性」「天然の道理」に基づく広義の窮理学を構築する条件がなく、その作業を自然科学に限定せざるを得なかったからである。そのためには、〈①「天然の道理」＝君臣、長幼の序、男女の別とする、幕府公認の実学、窮理学の心臓部の破壊→②萬里らによる自然科学を基礎とする→③広義の窮理学の構築〉という手順が必要であった。

11. 【本文】歴史とは年代記のくわしきものにて万国古今の有様を詮索する書物なり。

【現代語訳】「歴史」というのは、様々な出来事を年代順にくわしく述べたもので、様々な国の昔や今のことがら、有り様について、事実関係や因果関係などを探求する書物である。

12. 【本文】経済学とは一身一家の世帯より天下の世帯を説きたるものなり。

【現代語訳】「経済学」とは自分自身、自分の家のから始まってこの世の中全体

の経営について説明をしているものである。

13. 【本文】修身学とは、身の行いを修め人に交わりこの世を渡るべき天然の道理を述べたるものなり。

【現代語訳】「修身学」というのは、一身上の行動の仕方を修行し、人と交際しながらこの社会で生きていく天が人に命じた道理を述べたものである。

14. 【本文】これらの学問をするに、いずれも西洋の翻訳書を取り調べ、大抵のことは日本の仮名にて用を便じ、或いは年少にして文才ある者へは横文字をも読ませ、一科一学も実事を押さえ、そのことに就きその物に従い、近く物事の道理を求めて今日用の達すべきなり。

【現代語訳】（「人間普通日用に近き実学」の一環である）これらの学問をするには、その何れにしても、西洋の書物で日本語に訳されたものを調べて、（叙述に際しては、江戸時代の学術書が漢文で書かれていたという悪習慣をやめ、ましてや英語などで書くのではなく、自分たちの日常用語である）日本のかなを使った文で基本的に、行うべきである。場合によって、年が若くて文章の理解能力が高い者には、英語などのヨーロッパ言語の書物を読ませるべきである。その場合、どんな学問でも実際の事柄を押さえ、その事実に即し、その事柄の性質に従いながら、身近なところに、物事の因果関係や法則性などの事例を求めて、そのことによって現在の生活に役立たせるべきである。

【解説】中津洋学校は英学塾だったので、学問が「人間普通日用に近き実学」となるには、西欧の成果を積極的に取り入れることが大切だと述べている。そのさい、学術と教育の基本的な言語・文字として、最も平易なかなをふくむ日本語を提案している。近代以前のヨーロッパで学術書や聖書がラテン語で書かれていたのと同様、江戸時代を通じて日本では学術書は漢文で書く習慣となっていた。例えば萬里の『窮理通』も漢文で書かれていた。萬里は一度和文で書いたものを弟子に漢訳させた上で自ら漢文に手を入れていた。福澤のこの主張は、学術書をも自分自身の第一言語で書き著すことが基本という「学問」「文学」の国民的・近代的離陸の宣言であった。「年少にして文才ある者へは横文字をも読ませ」という箇所は、「平民の子弟で優秀なものは皆大学に入学して」

(「大学章句序」)を意識していると推察される。また、「一科一学も実事を押さえ、そのことに就きその物に従い」は、前述の「我の知を致さんと欲せば、物に即いてその理を窮むるに在る」「大学の始教は…凡そ天下の物に即きて、その已に知るの理によって益々これを窮め、もってその極に至らん」を意識している。

【語句】☆西洋の翻訳書：江戸時代を通じて読まれていたオランダ語や幕末以来読まれるようになった英語、フランス語等で書かれていた「原書」を和訳した書物。前野良沢や杉田玄白らによる「解体新書」が代表的なもの。☆文才：文章を読み書きし、理解表現する才能。☆横文字：ヨーロッパ言語表記の書物等。☆一科一学：一つ一つの事柄にかんする一つ一つの学。個別の「科学」のこと。

15. 右は人間普通の実学にて、人たる者は貴賤上下の区別なく皆悉くたしなむべき心得なれば、この心得ありて後に、士農工商各々その分を尽くし銘々の家業を営み、身も独立し家も独立し天下国家も独立すべきなり。

【現代語訳】右に述べたことは、人間として誰でもが共通の実学である。つまり、人である者はすべて、貴賤上下の区別なく、皆が身につけ使いこなせるべきことの基本である。そして、この基礎の上に初めて、士農工商というような職業に関わる事柄について、それぞれが天から与えられた役割を果たし、それぞれの家で代々行われてきた生業を実際に行うべきである。そして、自分自身も独立し、家も独立し、世界やその中にある国家も独立すべきである。

【解説】この部分は「その学ぶ者はもってその性分に固有する所、職分の当に為すべき所を知って、而して各々俛焉としてもってその力を尽くすあらざる無し」および「修身而后齐家、齐家而后治国、治国而后平天下」「身修まって后家斉う、家斉って后国治まる、国治まって后天下平らかなり」(『大学』宇野19,37ページ)に対応している。福澤は、これを換骨奪胎しようとしている。つまり、「性分に固有する所」をふまえた「人間普通日用に近き実学」という基礎があって初めて、「士農工商」というような世の中の分担としての「職分」でもある「家業」も盛んになる。その結果として、自分も家業も国家も世界も独立することが可能だという。ここで、「独立」という『学問のすすめ』全編を通じたキーワードが登場する。当時の日本は、不平等条約を締結することを

余儀なくされ、英仏露米等の植民地になる危険もあり、国家の独立は幕末明治の基本的課題だった。また、「瓦解」といわれた社会の大変動の中で人々とくに武家の生活は一変した。藩はなくなり、旧藩主は東京居住を義務づけられ、武士の特権や経済的基礎はほぼ廃止され、家計は逼迫した。武士の誇りは評価されず、今後の自分と家族の経済生活、誇りその他を急速に再構築する必要に迫られていた。そこに、福澤は「一身の独立」「一家の独立」「一国の独立」が時代のキーワードだと提起した。これは、「大学の道は明德を明らかにするに在り、民を親にするに在り、至善に止まるに在り」という『大学』第一章冒頭句を「学問の道は、身も独立し家も独立し天下国家も独立すべきことを明らかにするに在り」と言い換えたものである。そのために、多くの人々から驚きと歓迎、反発を受け、話題となった。そしてその「独立」が適切かどうかはひとえに「天が命じた性」の内容が君臣の秩序等の上下関係か、人はその位が同じかという「性」の内容如何に、さらにいえば、「仁」「義」「礼」「智」「実学」などの内容の再解釈に掛かっていたのである。

3) 「初編」第3段落：人権と国際関係のリテラシー

福澤はここで、冒頭のテーマに戻り、「天が命じた性」としての人の「分限」の内容を、right=dutyとして、積極的に再解釈する。植民地の危機という緊張した国際関係のもとで、人権と国際関係のリテラシーを論じている。

1. 【本文】学問をするには分限を知ること肝要なり。

【現代語訳】学問をするためには、「すべきこと」と「すべきではないこと」という「分限」を知ることが最も重要なことの一つである。

【解説】第二段落の結論は、「人間普通の日用に近き実学」としての学問の目的が、「身も独立し、家も独立し、天下国家も独立すべき」ことにある、ということだった。これを受けて福澤は、「独立」というキーワードが、人としての「分限」「職分」=right=dutyに合致しているのか否かを検証する作業に入る。

【語句】☆分限：行うことが許されている限界、範囲。幕末に幕府の「翻訳方」で外交文書の翻訳に従事したことがある福澤は、「duty」=人間として当然為すべきこと、という意味で、「分限」「職分」という語を用いることもあった。☆知る：事実関係、因果関係等を含め

である事柄を理解すること。

2. 【本文】人の天然生まれ付きは、繋かれず縛られず、一人前の男は男、一人前の女は女にて、自由自在なる者なれども、ただ自由自在とのみ唱えて分限を知らざれば我儘放蕩に陥ること多し。

【現代語訳】天が人に与えた生まれながらの性質は、(権力や権威によって)行動を制限されたり、抑圧されたりせずに、(一個の人間として知恵や技をもち、自立し自律している)おとなの男は男、おとなの女は女であり、自分自身の中に存在理由を求め、自分自身で生きていく者である。しかし、ただ(自立し自律している)「自由自在」な者というだけで、(人としての「理」である)人として為すべきこと、為すべきでないことという意味の「分限」を理解しなければ、自分勝手に人に迷惑をかけたなり、無軌道でやりたい放題になってしまうことも多い。

【解説】初編の冒頭句の内容を、自律的で自立した存在が「人の天然生まれ付き」の「性」だと、「独立」という点から、言い換えている箇所である。すべきことだけに注意して、してはならないことへの注意が足りない、「我儘」「放蕩」に陥ることは適切でないという、反発を予測して、予防線を張っていることが注目される。

【語句】☆一人前：一個の人として自立していること。☆自由自在：自らの中に存在や変化の理由を持ちその自律性=オートノミーを発揮できること。

3. 【本文】即ちその分限とは、天の道理に基づき人の情に従い、他人の妨げをなさずして我一身の自由を達することなり。

【現代語訳】ここで言う「分限」というのは、宇宙の中を貫く物事の存在や変化の法則性に基づき、人として実際生活をする上で生じる感情を尊重しながら、他の人の妨害をせずに、自分自身の自立的で自律的な生き方を実現することである。

【解説】人としての「分限」=right/duty=為すべきことと、為すべきでないこと、についてあらためて定義している。「我が一身の自由を達する」という叙述は、「天子よりもって庶人に至るまで、壹是に皆修身をもって本と為す」

(『大学』38ページ)の「修身」を置き換えたものと見ることができる。

4. 【本文】自由と我儘との界は、他人の妨げをなすとなさざるとの間にあり。

【現代語訳】「自由」と「我儘」との境界線は、自分のことのみを考えて他の人の自己実現を妨害するかしないか、という間にある。

【解説】これは、自分の自由を相手に尊重させるのであれば、相手の自由も尊重する、というright=dutyという考えが端的に出ている部分である。

5. 【本文】譬えば、自分の金銀を費やしてなすことなれば、仮令い酒食に耽り放蕩を尽くすも自由自在なるべきに似たれども、決して然らず、一人の放蕩は諸人の手本となり遂に世間の風俗を乱りて人の教えに妨げをなすがゆえに、その費やすところの金銀はその人のものたりともその罪許すべからず。

【現代語訳】例えば、自分自身が所有する金貨や銀貨を使うのであれば、仮に飲酒やバクチ、郭通いなどに耽ってもその人の勝手のようにだが、決してそうではない。一人のやりたい放題の行動は多くの人々の真似を引き起こし、結果的には社会全体の生活習慣を乱し、(人が「天然の性」人としての「職分」にしたがって「道」を修める)人の「教え」(を実行すること)の妨げになる。だから、消費する金銀がその人のものでも、放蕩が引き起こす罪は許されない。

【解説】right=dutyとしての「分限」の内、してはならないことを、例示している。

【語句】☆人の教えを：「道を修めるこれを教えという」(『中庸』)から来ている。「道」は天性の自然に備わるが、人が実践する場合にずれが生ずる。そこで、「聖人」が実際に行って示す必要があり、これを教えという(宇野『中庸』50ページ)。

6. 【本文】また自由独立のことは、人の一身に在るのみならず一国の上にもあることなり。

【現代語訳】ところで、自由独立ということは、人の一身上の事柄であるだけでなく、一国にとっても重大事である。

【解説】「古の明德を天下に明らかにせんと欲する者は、先ず国を治む。…」

(宇野「大学」34ページ)の《格物→致知→誠意→正心→修身→齐家→治国→明德を天下に明らかにする》という論理に沿った叙述である。第2段落で《格物→致知・窮理》と《一身独立(修身)→一家独立(齐家)→一国独立(治国)》という二つの図式を提示した福澤は、ここで、「一国独立」=国際関係のリテラシーへと踏み込んでゆく。

7.【本文】我日本は亜細亞洲の東に離れたる一個の島国にて、古来外国と交わりを結ばず独り自国の産物のみを衣食して不足と思ひしこともなかりしが、嘉永年中亜米利加人渡来せしより外国交易の事始まり今日の有様に及びしことにて、開港の後も色々と議論多く、鎖国攘夷などとやかましく言ひし者もありしかども、その見るところ甚だ狭く、諺にいう井の底の蛙にて、その議論取るに足らず。

【現代語訳】私たちの日本はアジア州の東にあり、大陸から海によって隔てられている一個の島国で、昔から外国との(定期的な)交流を結ばずに、独自に自国の産物だけに依存して何かは足りないと思ったこともなかった。嘉永年間に黒船でアメリカ人がやって来て(広く)外国貿易が始まり、(日米和親条約以後に長崎と横浜を諸外国に開港して)今日の(不平等条約下の交流という)有様になったが、それ以後も様々な議論があり、「鎖国」の継続や夷狄を排除する=「攘夷」などと騒がしく言った者もあった。しかしその議論を聞いてみると視野がとても狭く、諺にある(大海を知らない)「井の中の蛙」で、取るに足りないものであった。

【解説】対馬を窓口とする朝鮮国との外交・貿易関係や、長崎を窓口とする明・清、オランダとの交易関係が不平等条約によるものではなかったことから、福澤は、それらには論及していない。そして、1853年の日米和親条約以後イギリス、フランス等と結んだ不平等条約を強調して、ペリーが来てから「外国交易のこと始まり」とのべている。英仏露による植民地化の危機を強く意識してのことと、思われる。

8.【本文】日本とても西洋諸国とても同じ天地の間にありて、同じ日輪に照らされ、同じ月をながめ、海を共にし、空気を共にし、情愛同じき人民

なれば、ここに余るものは彼に渡し、彼に余るものは我に取り、互いに相教え互いに相学び、恥ずることもなく誇ることもなく、互いに便利を達し互いにその幸を祈り、天理人道に従って互いの交わりを結び、理のためには阿非利加の黒奴にも恐れ入り、道のためには英吉利、亜米利加の軍艦をも恐れず、国の恥辱とありては日本国中の人民一人も残さず命を棄てて国の威光を落とさざるこそ、一国の自由独立と申すべきなり。

【現代語訳】 東にある島国の日本もまた西洋諸国も同じ天と地の間、すなわち同じ世界にある。そこで暮らす人々は、同じ太陽に照らされ、同じ月をながめ、海を共にし、空気を共にし、人や自然に対する情や愛を同じくする人々である。だから、こちらで余っているものはあちらに渡し、あちらで余っているものはこちらで受け取って、たがいに教え合い、学び合う。卑屈でも横柄でもなく、互いに生活の便利を実現し、その幸福を祈る。宇宙の摂理とその中での人という存在の摂理、あるべき姿に従って互いの交際を行う。(人には生まれながらの上下貴賤はなく一個の独立した存在であるという、) 天が与えた摂理のためには、現在はモノのように売買されているアフリカの黒人や黒人奴隷にも礼を尽くす。同じ摂理のためには、イギリスやアメリカの軍艦をも恐れない。国が辱めを受けた場合には、(士族か平民かにとらわれずに協力して) 日本国中の全ての人々が一人の例外もなく命を棄てて国の威光を落とさず名誉を守る。このことこそが、一国の自由と独立の実現ということである。

【解説】 福澤は当時の時代状況について、文明の世の中といっても文明の入り口にすぎないので、欧米諸国は最終的には「砲艦外交」で決着をつけるというリアリティをもっていた。また、ヨーロッパ使節団の一員として香港やインドに立ち寄ったときに、清国人の卑屈さやイギリス人の尊大さを目の当たりにし、屈辱的扱いを受けないようにすべきでありそのためには「国民」「国民教育」「国民軍」などの創造・創設が急務だと感じた。国民の創造という意味で、統治者側の「人」と被統治者側の「民」の両方を含む「人民」という語が使われている。

【語句】 ☆阿非利加の黒奴：アフリカの黒人や黒人奴隷。1815年のウィーン会議で奴隷貿易廃止方針が示され、明治維新とはほぼ並行する南北戦争の結果1865年に、リンカーン大統領がアメリカ合衆国における奴隷制度の廃止と奴隷の解放を宣言するが、この時点ではアメリカ

全土には広がらず、黒人奴隷の貿易や使役は無くなっていない時代だった。多くの現代語訳の本で、「アフリカの発展途上国の住民」などと訳されているが、歴史的リアリティが薄まる。

9. 【本文】然るを支那人などの如く、我国より外に国なきが如く、外国の人を見ればひとくちに夷狄々と唱え、四足にてあるく畜類のようにこれを賤しめこれを嫌い、自国の力をも計らずして妄りに外国人を追い払わんとし、却ってその夷狄に窘めらるるなどの始末は、実に国の分限を知らず、一人の身の上にて言えば天然の自由を達せずして我儘放蕩に陥る者と言うべし。

【現代語訳】それなのに、清国人のように、自分の国以外には国が無いかのよう、外国の人を見れば、簡単に「夷狄」「夷狄」と言って未開人・野蛮人扱いし、四本足で歩く動物のように賤しい者として嫌い、自分の国の力も計算せずに、やたらと外国人を追い払おうとして、却ってその「夷狄」に苦しめられる結果になった。こうしたことは、(先に述べた国のright=dutyである)「一国の分限」を理解せず、一身について言えば、天が与えた自由を達するのではなく、自分のことしか考えずにやりたい放題をしてきたのと同じだといえるべきである。

【解説】アヘン戦争に関連する論述である。中心に「中華」、周囲に「東夷」「西戎」「南蛮」「北狄」という服属しない野蛮人、という「中華思想」に対する批判ととれる。なお、「支那人」を差別用語とし見なしてか、その箇所を欠落させた翻訳書もある。しかし《秦・清=china・チナ→シナ・「支那」》説が有力であり、「支那」自体を「差別用語」とすることには無理がある。また、「四足にてあるく畜類のように」という点では、アメリカ人が弁髪を清国人労働者輸送を「pig trade」と呼んだのに対抗してか、今日も香港・広東地域には白人を「白皮猪(ば・び・ちゅ)」という言い方が残っているのも一例といえる。「国の分限」は国のライトと同義と考えてよい。

10. 【本文】王朝一度新たなりしより以来、我日本の政風大いに改まり、外は万国の公法をもって外国に交わり、内は人民に自由独立の趣旨を示し、

既に平民へ苗字乗馬を許せしが如きは開闢以来の一美事、士農工商四民の位を一様にするの基ここに定まりたりと言うべきなり。

【現代語訳】(徳川幕府から「天皇」を国王とする明治へと)王朝が一新されてからは、私たちの日本の政治風土の有り様は大いに改まった。外に対しては万国に通用する公法即ち国際法によって外国と交際するようになった。国の内においてはすべての人々に自由独立の趣旨を示して、既に「平民」にも苗字をもつこと、馬に乗ることを許可したことなどは、歴史が始まって以来のすばらしいことである。士農工商の四民の地位を平等にする基本がここに定まったと言すべきである。

【解説】外国交際でも国際法というルールが適用されるようになったことだけでなく、日本国内では人々が平等だという点では、旧幕府時代と決定的に異なる改革が進行していることを、福澤は強調し、中津十萬石の奥平藩が「譜代」であったことから徳川王朝の「瓦解」を消極的に受け止める傾向もあった旧中津藩士に向かって、変化が不可逆的であり、すばらしいものであることを説いている。

11. 【本文】されば今より後は日本国中の人民に、生まれながらその身に附きたる位などと申すは先ずなき姿にて、ただその人の才徳とその居所とに由って位あるものなり。

【現代語訳】だから明治の現在より後は、日本国中のすべての人々に関して、生まれながらその身に付いた地位というものは、まず無いことになる。その才能と人徳や社会の中でのその人の役割によってだけ、人の地位が決まるのである。

【解説】すでに世襲的な身分制の幕藩時代は終わったので、①家老であったとか、上士だったとかいう観念は棄てるべきだ、②今後は個人個人の社会における仕事の実績によってのみ地位が決まるので、一人一人が自分の才能と「人徳」=人としての共感能力、人とともに生きていく能力、根元的な「道」を実践していく能力を磨くことが大事だと、説得している。これ以後第15文まで、人の「才徳」と偽きを無視した旧秩序の無意味さを批評している。

12. 【本文】 譬えば政府の官吏を粗略にせざるは当然の事なれども、こはその人の身の貴きにあらず、その人の才徳をもってその役儀を勤め、国民のために貴き国法を取り扱うがゆえにこれを貴ぶのみ。

【現代語訳】 例えば、政府の役人を粗末に扱わないのは当然のことであるが、それはその役人自体が貴いからではない。その才能や人徳によって役割を勤めて、国民のために大事な国の法律を取り扱うからこそ、役人を大事に扱うのである。

【解説】 地位ではなく働きが重要だと重ねて述べている。

13. 【本文】 人の貴きにあらず、国法の貴きなり。

【現代語訳】 人が貴いのではない、国の法が貴いのである。

【解説】 人の安全や生活にかかわる国家の法を扱うという重要な機能を果たしていると見なされるから貴いので、機能と無関係に官吏が貴い訳ではないと、「むつかしき仕事をする者を身分重き人と名づけ、やすき仕事をする者を身分軽き人という」という第一段落の趣旨を敷衍している。

14. 【本文】 旧幕府の時代、東海道にお茶壺の通行せしは、皆人の知るところなり。

【現代語訳】 徳川幕府の時代の（将軍家「御用」の茶壺を運んだ）東海道のお茶壺道中（が茶壺を運んでいるにすぎないのに人々を土下座させたことは）、みんなが知っていることである。

15. 【本文】 その外御用の鷹は人よりも貴く、御用の馬には往來の旅人も道を避くる等、すべて御用の二字を附くれば石にても瓦にても恐ろしく貴きもののように見え、世の中の人も数千百年の古よりこれを嫌いながらまた自然にその仕来りに慣れ、上下互いに見苦しき風俗をなせしことなれども、畢竟これらは皆法の貴きにもあらず、品物の貴きにもあらず、ただ徒に政府の威光を張り、人を畏して人の自由を妨げんとする卑怯なる仕方にして、実なき虚威というものなり。

【現代語訳】 その外に、徳川将軍家の鷹狩りの鷹は人よりも貴く、幕府関係の

馬には街道を旅する人々も道を空けるなど、すべて「御用」の二文字をつければ石でも瓦でも恐ろしく貴いもののように見えた。世の中の人々も数千年の昔から、こうしたことを嫌いながらも、その仕来りに次第に慣れて、上下の間に見苦しい風俗を生み出してしまった。しかし、結局、これらのことは皆、法が貴いのも、品物が貴いのもない。ただ無意味に、政府が威張って、人を脅かして人の自由を妨げようとする卑怯な仕方、実質的な裏づけのない空威張りというものである。

【解説】永年続いてきた権威主義的な生活習慣が「繋がれず縛られず…自由自在」である「天命の性」と両立しないことを、例示している。

16. 【本文】今日に至りては最早全日本国内にかかる浅ましき制度風俗は絶えてなき筈なれば、人々安心いたし、かりそめにも政府に対して不平を抱くことあらば、これを包みかくして暗に上を怨むことなく、その路を求めその筋に由り、静かにこれを訴えて遠慮なく議論すべし。

【現代語訳】明治の今日では、もはや、日本全国においてそのような（「不羈自由」＝「天の道理」に反する）理不尽で卑怯な制度風俗は断ち切られて無くなったはずである。だから人々は安心して、万が一にも政府に対して不平をもったときには、これを隠して心の中で政府を怨むのではなく、（不平が適切に解決される）ルールとルートを探求し、そのルールとルートに従って、冷静にその不平を伝えて遠慮することなく議論するべきである。

【解説】相手が政府の官吏でも、「繋がれず縛られず…自由自在」である「天命の性」という「天の道理」を実現するためには率直に政府に提起し、議論し、解決の道を探るべきだとしているが、こうしたことは当時の中津藩士のみならず大多数の人々にとって想像しにくい方法だったから、大きなショックを与えたであろう。そして後に「自由民権運動」に積極的な影響を与えていくことになる。

17. 【本文】天理人情にさえ叶う事ならば、一命をも抛て争うべきなり。

【現代語訳】（「繋がれず縛られず…自由自在」である「天の道理」、人としての「分限」は譲ることができないので、事柄の性質が）天理人情にさえ叶っている

れば、(場合によっては)一身の命を犠牲にしても争うべきである。

【解説】このセンテンスと次のセンテンスは、第4段落で「繋がれず縛られず…自由自在」である「天の道理」人としての「分限」を実現するための、基本姿勢と手段について述べる伏線となつてとともに一国独立に視点を再転換している。

18. これ即ち一国人民たる者の分限と申すものなり。

【現代語訳】これが、一国の人民としての「分限」、(すなわち当然なすべきこと) というものである。

4) 「初編」第4段落：教育リテラシーと『大学』の書き換え

ここでは、先ず第3段落を要約した後、「それぞれの身分」にふさわしい「才能」「人徳」を身につけるために、「物事の理」を知ること「そのために文字を学ぶ」ことが重要だとする。次いで、すでに統治階級ではなくなった旧藩士=士族に対して「民」という用語を用いて、政府と人民との関係について述べ、同時に「子孫を教えること」=教育リテラシーを展開する。そして最後に一身の「不羈自由」から「家督」の安全、良民と良政府が共に支える国家、「全国の太平」の全てを貫通する「学問」の目的を述べて、結びとしている。

1. 前条に言える通り、人の一身も一国も、天の道理に基づきて不羈自由なるものなれば、もしこの一国の自由を妨げんとする者あらば世界万国を敵とするも恐るるに足らず、この一身の自由を妨げんとする者あらば、政府の官吏も憚るに足らず。

【現代語訳】先に述べたように、一人の人も一つの国も、天(が人に命じた当然の性質)の道理に基づいて、束縛されない自由な存在である。だから、もしも一国の自由を妨げる動きに対しては、世界中のすべての国々を敵に回すことでも恐れる必要はない。自分の一身の自由を妨げようとする者がある場合には、政府の役人であっても憚る必要はない。

【解説】第三段落の要約である。前出の「繋がれず縛られず…自由自在」を、「不羈自由」と言い換えている。後に福澤は「独立不羈」「独立自尊」という言葉を多用する。「羈」は馬が繋がれること、「不羈」は束縛されないこと。

2. ましてこのごろは四民平等の基本も立ちしことなれば、何れも安心いたし、ただ天理に従って存分に事をなすべしとは申しながら、凡そ人たる者はそれぞれの身分あれば、またその身分に従い相応の才徳なかるべからず。

【現代語訳】 とくに最近では、士農工商の四民が同等という基本も整ったので、誰でも安心して、天が定めた人の平等自由という道理に従って、まっすぐに思う存分に事を進めるべきである。しかし、現実を考えると、一般にそれぞれの人には権限や立場社会における分担などがあるので、(人としての平等自由というright=dutyに加えて) 自分自身の権限や立場や分担にふさわしい、人としての才能と、(他の人と共感し協力しながら道を実践する力すなわち) 人徳が欠かせない。

【解説】 ここでは、第2段落第15文で展開された、《「人間普通日用に近き実学」という共通の基礎と「士農工商」などの分担による具体的な「家業」とが必要》と同じ論理を、展開している。それは、《「不羈自由」という「天の道理」という基礎と、具体的な「その身分に…相応しい才徳」が必要》というものである。『大学』の「その学ぶ者もってその性分に固有する所、職分の当に為すべき所を知って、而して各々俛焉としてもってその力を尽くすあらざる無し」(宇野19ページ) に対応している。

3. 身に才徳を備えんとするには物事の理を知らざるべからず。

【現代語訳】 才能と人徳を身につけようとするには物事の性質・法則性や因果関係などを知ることが欠かせない。

【解説】 「格物致知窮理」が才能と人徳を身につける上で不可欠だと述べている。これは、『大学』の次の部分を受けている。すなわち、「物格って后知至る。知至って后意誠なり。意誠にして后心正し。心正しくて后身修まる。身修まって后家斉う。家斉いて后国治まる。国治まって天下平らかなり」および「知を致すは物に格るに在りとは、我の知を致さんと欲せば、物についてその理を窮むるに在るを言うなり」(宇野37、52ページ)。

4. 物事の理を知らんとするには字を学ばざるべからず。

【現代語訳】 (世の中で様々なことを分担して実行するために) 物事の法則や因

果関係、個別的な物と全宇宙との関係としての「物事の理」を学ぶには、文字を学ぶことが欠かせない。

【解説】第2段落の全体で、「人間普通の日用に近き実学」の教育課程という角度からリテラシーを論じたが、ここでは、文字の習得・活用＝リテラシー論、識字論にふれている。この第4段落では第4・5文で切り口を作った後、一種の《非識字がもたらす悪循環の理》と《識字がもたらすメリットの理》を提示している。すなわち、①《（機能的）非識字→無知＝物事の理を知らないこと→恥知らずな振る舞い→専制的政府》という《非識字についての理》、および②《（機能的）識字→学問→知恵・物事の理を知る→文明の風に赴く→寛大な政府》という《識字についての理》である。この二つを対比的に提示して、読者に選択を迫っている。なお、後日刊行された「二編」の「端書」でも、その3分の2を費やして識字論を述べている。すなわち、第6-19文で、経済生活を含んだ日常生活に文字を活用することができない一種のfunctional illiteracy＝機能的非識字状態にある旧士族のリテラシーの問題点を指摘し、「世帯」「帳合」「時勢」など生活にかかわる全ての領域における学問の開拓創造こそが、そのような機能的非識字状態を克服するものだ、と出口を提示している。

5. これ即ち学問の急務なり。

【現代語訳】（人としての尊厳と一国の尊厳をふまえ、それぞれの分担を実行するために、自分の地位に相応しい才能や人徳を身につけ、物事の法則性や因果関係を知ること、そのために文字を学ぶこと、これらを一連のものとしてとらえ実行すること）これが、現在の学問にとっての緊急の必要である。

6. 昨今の有様を見るに、農工商の三民の内にも人物あれば政府の上に採用せらるべき道すでに開けたることなれば、よくその身分を顧み、我が身分を重きものと思ひ、卑劣の所行あるべからず。

【現代語訳】最近の状況を見ると、士族ではない農民、職人、商人出身者でも、見るべき能力を持っている人であれば政府の役人として採用される道がすでに開けている。（だから、町人や農民であった平民であっても自分の才能や人徳を磨けば、様々な道を拓くことができる。同時に、かつて中津十萬石の藩士

だったとしても、具体的な才能や人徳を身につけなければ、その将来の生活には何の保証もない。)各個人が自らの、よくその社会的地位を考えて、自分自身の地位を大事なものと考えて、卑劣な行動に及んではならない。

7. 凡そ世の中に無知文盲の民ほど憐れむべくまた悪むべきものはあらず。

【現代語訳】一般的に世の中で、文字や文章を理解し使いこなせず、物事の道理を知らないで、ひたすら統治されるだけの者(=民)ほど、憐れまれ、歓迎されない者はいない。

【解説】ここでは、《「文盲」=非識字状態→無知→統治されるだけの存在としての「民」→憐れむべき、歓迎されない存在》という図式を示している。福澤はここで初めて、《統治する立場の「人」》の対立概念である《非統治者としての「民」》を使っている。そして「民」に向かって「そんなことでいいのか」と挑発している。この第7文から第12文までは、第13文の「かかる愚民を支配するには、逆も道理をもって論すべき方便なければ、ただ威をもって畏すのみ」以下「愚民の上に苛き政府あり」(14)「政府の苛きにあらず、愚民の自ら招く災いなり」(15)を媒介として、第16文「愚民の上に苛き政府あれば、良民の上にはよき政府あるの理なり」という結論を導き出すための、伏線である。そのために、理不尽とも思える「無知文盲の民」批判が展開されている。

8. 知恵なきの極みは恥を知らざるに至り、己が無知をもって貧窮に陥り飢寒に迫るときは、己が身を罪せずして妄りに傍らの富める人を怨み、甚だしきは徒党を結び強訴一揆などとして乱妨に及ぶことあり、恥を知らざるとや言わん、法を恐れずとや言わん。

【現代語訳】無知の行き着くところは、恥知らずである。自分の無知が原因で貧窮、飢えと寒さが迫っているときに、自ら問題点を顧みること無く、やたらに近く富んだ人を怨む。甚だしい場合には徒党を組んで「強訴」「一揆」などの乱暴に及ぶこともある。恥知らずというべきである。法を蹂躪していると言うべきである。

9. 天下の法度を頼みてその身の安全を保ちその家の渡世をいたしながら、そ

の頼むところを頼みて、己が私欲のためにはまたこれを破る、前後不都合の次第ならずや。

【現代語訳】自分が生活している社会の法に依存して身体の安全や家の経済生活を行いながら、都合のいいときには依存し、自分の私的な欲望のためにはその法を破る。一貫性のないご都合主義ではないだろうか？

【解説】第7-9文は、どちらかといえば経済的に貧しい状況にある「無知文盲の民」に対する批判もしくは非難であったが、次の第10-12文は、「身本慥にして相応の身代ある」状況における「無知」の民の場合である。

10. 【本文】或いはたまたま身本慥にして相応の身代ある者も、金銭を貯うることを知りて、子孫を教うることを知らず。

【現代語訳】場合によっては、たまたま身元もしっかりしていてそれ相応の財産がある者の場合でも、お金を貯めることは知っていても、子どもを教えることを知らないこともある。

【解説】「子を教えざるは父の罪なり」という言い方もあったが、江戸時代の代表的な子育ての書『和俗童子訓』（貝原益軒）は、子どもとくに男の子を育てるのは父もしくは兄の勤めであり、人と人がきちんと向き合い厳しさも含まれる「愛敬の教え」の重要性を説いていた。「金銭を貯うることを知りて、子孫を教うることを知らず」という部分は、引きこもり、フリーター、ニート等が社会問題化している今日、益々新鮮である。多国籍企業の本拠地となり、職が無くても飢え死にしない状態が作られ、産業のソフト化、生活のバーチャル化、リテラシーの形式化が進行する現代の日本を含む国々にとって、社会連携、社会構造の見直しの視点からも重要である。同時に親としてのキャリア形成、「親業」を全うする課題を避けて通らずに、きちんと位置づける必要もある。この点への予言のような新鮮な驚きを今日も与えている。『中庸』によれば、「教え」とは「道」を修めることである。法政大学キャリアデザイン学部主催のいくつかのシンポジウムでも、親が子どもと一緒に働くこと、楽しむこと、その中で、「やってみせる、一緒にやる、一人でやらせる」という手順をきちんと踏んだ教育が必要だと強調されてきた（笹川孝一編『生涯学習とキャリアデザイン』法政大学出版局2004年、法政大学キャリアデザイン学会編『生涯学

習社会とキャリアデザイン』第4号 2006年)。

11. 【本文】 教えざる子孫なればその愚なるもまた怪しむに足らず。

【現代語訳】 親や祖父母が責任を持って教えない子どもや孫だから、その人が愚かになるのも避けられないことである。

12. 【本文】 遂には遊惰放蕩に流れ、先祖の家督をも一朝の煙となす者少なからず。

【現代語訳】 挙げ句の果てには、家業や学問をきちんと行わずに遊び惚けて、先祖が作り上げ、代々受け継いできた家の財産を、一晩で煙のように消してしまうような者も少なくない。

13. 【本文】 かかる愚民を支配するには、逆も道理をもって論すべき方便なければ、ただ威をもって畏すのみ。

【現代語訳】 (道理を弁えない) そのような愚かな民を支配するには、道理をもって論す方法はないので、ひたすら権力、権威で脅すしかない。

【解説】 この第13文から第15文では、政府と「民」との関係について、〈「愚民」→「苛き政府」〉という「理」を提示して、人々の発憤を促している。

14. 【本文】 西洋の諺に愚民の上に苛き政府ありとはこのことなり。

【現代語訳】 西洋の諺で言う「愚かな民の上には民に厳しい政府がある」というのは、このことを指している。

15. 【本文】 こは政府の苛きにあらず、愚民の自ら招く災いなり。

【現代語訳】 これは政府が非道いというのではない。愚かな民が自分自身で招いた災害である。

【解説】 これも挑発的発言である。

16. 【本文】 愚民の上に苛き政府あれば、良民の上にはよき政府あるの理なり。

【現代語訳】 愚民の上には苛烈な政府があるのと同じ道理によって、道理を弁

えた民の上にはよい政府があるということになる。

【解説】《「愚民」→「苛き政府」》コースと《「良民」→「良政府」》コースとの二者択一を迫っている。

17. 【本文】故に今、我日本国においてもこの人民ありてこの政治あるなり。

【現代語訳】したがって今、私たちの日本国においても、この人民があつてこの政治があるのである。

【解説】当時の政府が「苛き政府」か「良政府」かの評価をあえて控えて、《「この人民」→「この政府」》という図式を示し、「この」の内容を自分で埋めるよう促している。「良政府」を求めるのなら自ら「良民」となるべきで、「苛き政府」でもいいなら「愚民」でもよいという図式である。『学問のすすめ』では、ここで初めて、「人」と「民」の両方を含む「人民」という語を使っている。《「知徳ある賢い人民」→「知徳を備えた良政府」》コースの選択を期待してのこと、と考えられる。

18. 【本文】仮に人民の徳義今日よりも衰えてなお無学文盲に沈むことあらば、政府の法も今一段嚴重になるべく、もしまた人民皆学問に志して物事の理を知り文明の風に赴くことあらば、政府の法もなおまた寛仁大度の場合に及ぶべし。

【現代語訳】もしも人民の人徳や（人に対してきちんと向かい合うという行動基準としての）義が今日よりも衰えて、学問をせずに文字を使いこなすことができない状態が非道くなっていくならば、政府の法も一段と厳しいものになるに違いない。反対に、もしも人々が皆、学問への志をもって、物事の法則性や因果関係を理解し、人間社会の文明の発展方向に沿って進むならば、政府の法も寛大で度量の広いものとなるに違いない。

【解説】ここでは、学問の所に戻って《人民の徳義の衰弱・無学文盲→さらに嚴重な政府》《学問を志し、物事の理を知り、文明に赴く人民→寛大仁度の政府》と言い換えている。

【語句】☆人民の徳義：「義」とは「仁」＝人と人がきちんと向き合い、優しさと厳しさをもちて接する愛の観点から見て当然行うべき、あるいは行うべきでない行動基準。☆無学文

『学問のすすめ』のリテラシー論的再解釈(1) 「初編」および「二編」の「端書」 51

盲：書物を系統的に読んだり、教師の話を系統的に聞いた経験がなく、文字や文章を見てもその意味を解することができないこと。☆学問に志して：「我十有五にして学に志し」「論語」為政篇の言葉（岩波文庫版『論語』28ページ）。☆文明の風に：「武」によらず「文」によって周辺地域の人間を同化していく「文化」が次第に明るさを増していく「文明」の方向に。☆寛仁大度：孔子的儒学の中心概念である「仁」において十分に寛く、度量が大きいこと。『論語』によれば、「仁」とは、卑屈にも傲慢にもならず、人に対して人としてきちんと向き合うことであり、「愛」と云ってもよい、とされている。

19. 【本文】法の苛きと寛やかなるとは、ただ人民の徳不徳に由って自ずから加減あるのみ。

【現代語訳】法が苛烈であるか寛大であるかは、ひとえに人民即ちすべての人々の人徳が十分か不十分かによって、変動するものである。

【解説】第18文の趣旨を、「政府」と「法」を入れ替えて言い直したもの。「ただ人民の徳不徳に由って…のみ」と言い切っている。人々の強い主体性を喚起している。

20. 【本文】人誰か苛政を好みて良政を悪むものあらん、誰か本国の富強を祈らざる者あらん、誰か外国の侮りを甘んずる者あらん、これ即ち人たる者の常なる情なり。

【現代語訳】どんな人でも、苛烈な政治、政府を好んで、寛大な政治・政府を嫌う人はいないだろう。いったい誰が、自分の国の富強を祈らないだろうか。いったい誰が外国によって馬鹿にされることを歓迎するだろうか？ こういうことは皆、人にとって共通の日常的な感情である。

【解説】ここで論述は、国内の「苛政」「良政」という点から、国際関係へと視野を拡大している。当時東アジアでは、タイ、朝鮮と日本だけが欧米列強による植民地的状況から免れていた。しかし朝鮮は、イギリスによるアヘン戦争以後、解体過程に入りつつあった清国に対して臣下の礼をとる朝貢国の関係にあった。そして日本も不平等条約締結を余儀なくされ、「外国の侮り」を受けていた。このような厳しい国際関係の下で、「不羈自由」を貫くためには、国家とその「人民」とが学び賢くなり、「富強」を実現する以外にない、という

主張である。〈「弱小国」→侮りを甘受〉〈「本国の富強」→「国の独立」〉という「国の独立にかかわる理」にかんする図式の提起である。

【語句】人誰か…あらん：どんな人が…だろうか？ ☆本国の富強：日本を始め不平等条約を結んでいる国の人々にとっての自分の国。 ☆外国の侮り：関税自主権がなく、治外法権を認めているなどの不平等な状態。

21. 【本文】今の世に生まれ報国の心あらん者は、必ずしも身を苦しめ思いを焦がすほどの心配あるにあらず。

【現代語訳】 こういう訳だから、現代の世に生まれて自分の国のために働こうとする心がある者は、自分一人で身を苦しめて、心理的に追いつめられるような心配をする必要はない。

【解説】 「国の独立にかかわる理」にかんする図式をふまえて、〈「本国の富強」→「国の独立」〉コースを実現すればよいのだから将来を悲観する必要はない、と鼓舞している。

【語句】 ☆今の世に：幕末から明治にかけてアメリカ、英吉利、フランス、ロシア等との関係で不平等条約を結ばざるを得ない状況としての「今の世」である。 ☆報国：生まれた国に対し、自らの「職分」を尽くすことをもって報いること。

22. 【本文】ただその大切なる目当は、この人情にもとづきてまず一身の行いを正し、厚く学に志し博く事を知り、銘々の身分に相応すべきほどの知徳を備えて、政府はその政を施すに易く諸民はその支配を受けて苦しみなきよう、互いにその所を得て共に全国の太平を護らんとするの一事のみ、今余輩の勤むる学問も専らこの一事をもって趣旨とせり。

【現代語訳】 ただ、そのような人にとって大事なことは次の点である。一人一人の人は、人々に共通の人情に基づいて、まず自分自身の行動をきちんとし、学問にしっかりと志し、広く物事やその道理を知って、それぞれの地位に相応しい知恵や徳を備えること。政府はその仕事を行いやすく、様々な人々は政府の支配を受けて苦しむことがないようにすること。そして、政府と人民とが、互いに自分自身の持ち場を確保して、協力しあって日本を含む全世界の太平を維持発展させること。今私が勤める学問の趣旨も、専らこの点に集約される。

【解説】第4段落と初編の全体を総括している文である。〈「本国の富強」→「国の独立」〉の図式に、〈修身→学に志す→博く事を知る→それぞれの身分に相応する知徳を備える→良政府〉を加えて、{|〈修身→学に志す→博く事を知る→それぞれの身分に相応する知徳を備える→良政府〉+〈「本国の富強」→「国の独立」→「全国の太平」=「平天下」〉}| という図式を示している。これは、福澤が第2段落で提示した〈人間普通の実学+士農工商が各々その分を尽くし銘々の家業を営む〉→「身も独立し家も独立し天下国家も独立す」という図式に「政府」「人民」というアクターを付け加えて再構成したものといえる。そしてそれは、「物格って后知至る。知至って后意識なり。意識にして后心正し。心正しくて后身修まる。身修まって后家斉う。家斉いて后国治まる。国治まって天下平らかなり」という、「大学」の中心的センテンスの書き直し作業の一応の完結を意味する。

【語句】諸民：「政府」との関係における文脈なので被統治者を指す「民」の語を使い、様々な民という意味で「諸民」という用語を使っている。☆全国の太平：ここではすべての国=万国=世界中の平和という意味。☆専らこの一事をもって：「大学の道は明德を明らかにするに在り、民を親たにするに在り、至善に止まるに在り」と「大学」冒頭句が述べるように、朱子学ではもともと、人間の生活に関連するすべての物の理を、知を媒介として明らかにし、人の生き方、家や国家の経営、天下の平和を実現するという、目的意識的な性格を持っていた。福澤もこれに習って、議論の本旨をたて、問題を鋭角的に提出している。

5) 「初編」「端書」

1. 【本文】このたび余輩の故郷中津に学校を開くにつき、学問の趣意を記して旧く交わりたる同郷の友人へ示さんがため一冊を綴りしかば、或人これを見て云わく、この冊子を独り中津の人のみへ示さんより、広く世間に布告せば、その益もまた広がるべし、との勧めに由り、乃ち慶應義塾の活字版をもってこれを摺り、同志の一覽に供うるなり。

【現代語訳】このたび私の故郷である大分県の中津に学校を開くことになったので、「学問」というものの基本的な性格や役割について私の考えを書き記して、昔からのつきあいのある中津出身の友人に示すために一冊の文章を書いた。

ところが、これを見たある人が、この冊子を中津の人だけに示すのではなく広く世間に示せば広く役立つに違いない、と勧めてくれた。そこで、慶應義塾の活字で版を作って印刷し、志を同じくする人々に見てもらおうこととした。

【解説】福澤諭吉は1834年に父・百助の赴任先大阪で生まれたが、父の死によって、1836年、三歳の時に、母・八重、兄三之助らと共に、豊前中津藩の城市・中津に行き、21歳の時に修行で長崎に往くまで約18年間を過ごした。その中津の家老の屋敷跡に英学を主とする「中津市学校」を開く支援をした。慶應義塾の中津版といえる。『福翁自伝』において「門閥は親の敵」という文脈で「中津を出るときは唾を吐くような気分が出てきた」と述べていることを根拠に、「福澤は中津を嫌っていた」とする議論も多い。しかし、小幡篤次郎、中上川彦次郎など親類縁者を中心とする中津出身者と共にその後の事業を行っているので、身分制の厳しい中津を嫌っていたことが事実であっても、中津の全部を嫌っていたとはいえない。むしろ、この『学問のすすめ』や「中津留別の書」などに見るとおり、中津への愛着は強かったと見てよい。

2. 【本文】明治四年未十二月 福澤諭吉・小幡篤次郎記（明治五年二月出版）

【現代語訳】明治四年羊年十二月 福澤諭吉と小幡篤次郎が記す（明治五年二月出版）

【解説】小幡篤次郎は中津では福澤よりも格上の上士だったので共同署名は、より大きな影響力を発揮するため、と推測されている。☆小幡篤次郎：中津藩出身。諭吉の母方の親類小幡篤蔵の子。慶應義塾開設に当たって中津より江戸に出、後に中津市学校長や慶應義塾の「要職」を勤め、終生福澤を助けた。

6) 「第二編」「端書」：窮理学の伝統をふまえて必要な学問を創造する

「初編」が当初、中津洋学校の教員や学生向けに書かれたのに対し、この「二編」は、最初から、日本社会全体に向かって公刊を目的として書かれた。ここで、福澤は、『大学』「大学章句序」における「大学の教え」の基本を現代的に書き直すことを意識して、「学問」の分類、学問の目的、学問にとっての文字と読書の役割、生活に密着する学問の開拓・創造についてあらためて述べ、「学問の大趣意」とした。

1. 【本文】 学問とは広き言葉にて、無形の学問もあり、有形の学問もあり。

【現代語訳】 「学問」という言葉が扱う範囲は広いもので、形のない（五感では直接認識できない）ものについての学問もあるし、（五感で直接関知できる）形あるものについての学問もある。

【解説】 五感で認識できないものを対象とする「無形の学問」は「宋学」における「気」や「理」の世界に属するものである。五感で認識できるものを対象とする「有形の学問」は「物」の世界に属する。

2. 【本文】 心学、神学、理学等は形なき学問なり。

【現代語訳】 心についての学問、神についての学問、物事の関連性や変化の法則性についての学問などは、形のない、見たり聞いたり触ったり、五感では直接触れられない物を対象とする学問である。

【解説】 伊藤注釈書は、「心学」は石田梅岩を創始者とする自分自身の精神と行動ををコントロールするいわゆる心学ではなく、「修身学」（モラルサイヤンス）だろうと推測している。この時代にはサイコロジーとしての「心理学」という言葉は未成立だった。「神学」について、伊藤はキリスト教の神学に限定されない広く宗教にかんする学と推定している。「樊遲何を問う。子の曰わく、民の義を務め、鬼神を敬してこれを遠ざく、知というべし」（『論語』85ページ）と関連があると思われる。「理学」は論理学を指すと考えられる。

3. 【本文】 天文、地理、窮理、化学等は形のある学問なり。

【現代語訳】 天体についての学問、地理についての学問、物理学、化学などは、形のあるもの、見たり、聞いたり、触ったり、五感で感ずることができることができるものについての学問である。

【解説】 「天文」は天体の運動にかんする学問で、古く中国にもあり、三浦梅園や帆足萬里も天文研究を行っている。「地理」は「天地」の「地」すなわち地球上の表面における気候、産業等にかんする学問、「究理」は、ここでは、力学を中心とする、今日の物理学を指し、「化学」は物質の変化にかんする学問。

4. 【本文】 何れにても皆知識見聞の領分を広くして、物事の道理を弁え、人

たるものの職分を知ることなり。

【現代語訳】(形のないものについての学問も、形のあるものについての学問も) 両方ともに、知識や見聞の領域を広くして、物事についての、宇宙の中でのそれぞれの特性や関連性、変化についての原因や結果の関係を識別し、人間というものの独自の意味や役割を知ること、その目的がある。

【解説】ここでは「学問」全体の性格を整理している。「知」は事実認識に立って物事の原因結果等を理解する精神作用で、「識」は、知る、考える、その結果をシンボル化したもの、の意味。「職分」は古く、『大学』にあり、ここでは duty の訳語としても使われている。「義」が主として人間と人間との関係における、当然なすべきこと、を指すのに対し、「職分」は神や天との関係における当然なすべきこと、という意味合いが強い。

5. 【本文】知識見聞を開くためには、或いは人の言を聞き、或いは自ら工夫をめぐらし、或いは書物をも読まざるべからず。

【現代語訳】知識や見聞を開拓するためには、ある時には、経験や学識のある人の話や言葉に耳を傾けたり、ある時には、自分自身でよりよい方法を考えて実際にやってみたりすることが大事だが、ある時には書物を読むことも欠かせない。

【解説】「人の言を聞き」と「書物」云々は『論語』の世界における「学」についての認識だが、「自ら工夫を」云々は、「格物致知窮理」を基本テーゼとする宋学的見解である。

6. 【本文】故に学問には文字を知ること必要なれども、古来世の人の思うが如く、ただ文字を読むのみをもって学問とするは大いなる心得違いなり。

【現代語訳】だから、学問にとって文字を理解し使いこなすことは必要である。しかし、昔から多くの人々が考えてきたように、たんに文字を読むことだけで学問だとすることは、大変な思い違いである。

【解説】ここから、福澤はリテラシー論を展開する。先ず、文字を形式的に操作する、文字を使って文献を読むだけでは不十分だと、徹底的に批判する。士族の教養は詰まる所、文字を知っているだけで文字を活用して、具体的な学問

分野を開拓し、具体的な生活分野を活性化することができない点では、「無用の長物」だった。そのような学問では、幕末から明治への激動期に、個人的にも国家的にも対処できない、と警鐘を鳴らす。それに続けて、文字は活用するもの！生活に密着したあらゆる分野に関して、学問を創造し発展させよう！産業や経済を含めて生活を発展させよう！そのために、既知の学問成果、文字を活用しよう！と、呼びかける。「古来世の人の思うが如く」とは『論語』の「学」の見解に対する批判とも考えられる

【語句】心得違い：基本的認識が誤っている。

7. 【本文】文字は学問をするための道具にて、譬えば家を建つるに槌鋸の入用なるがごとし。

【現代語訳】文字は学問をするための道具であって、家を建てるのにハンマーや鋸が必要なと同じである。

【語句】☆槌鋸：槌＝ハンマーと鋸。大工の基本的道具。

8. 【本文】槌鋸は普請に欠くべからざる道具なれども、その道具の名を知るのみにて家を建つることを知らざる者は、これを大工といふべからず。

【現代語訳】ハンマーや鋸は建設工事に不可欠な道具だが、その道具の名前を知っているというだけで、(ハンマーや鋸を使いこなして)家を建てることを知らない者は、大工と認定されない。

【語句】☆普請：建物や橋、道路などの建築構造物を新たに作り、あるいは改修こと。☆道具の名を知るのみにして：論理としては、名を知るといよりも、道具を所有しているだけでそれを使って家を建てることを知らない者は、という方が的確。やや論理に混乱がある。☆大工：建築物の骨格および全体設計、指揮等を担当する建築作業の中心的職人。

9. 【本文】正しくこの訳にて、文字を読むことのみを知って物事の道理を弁えざる者は、これを学者と言ふべからず。

【現代語訳】まさに、これと同じように、文字を読むことだけを知って、具体的な物事にかんする事実や相互関係、変化の法則やその原因などの「道理」を理解し、(具体的にとるべき行動を提起でき)ない者は、これを学者すなわち

学問をする人と言えない。

【語句】☆学者：ここでの意味は「学問をする人」全体を指し、必ずしもそれを生業、職業をする人を指すのではない。アマチュアもふくまれている、今日の「研究者」という意味に近い。

10. 【本文】いわゆる論語読みの論語知らずとは、即ちこれなり。

【現代語訳】（『論語』を読んで暗誦すらしていても、その内容を理解し、実際の場面で活用できない人、）いわゆる「論語読みの論語知らず」とは、このような人を指す。

11. 【本文】【本文】我邦の古事記は暗誦すれども今日の米の相場を知らざる者は、これを世帯の学問に暗き男と言うべし。

【現代語訳】わが国の古事記を暗誦しているが、今日の米の相場を知らない者は、これを家計についての学問に暗い男と、言うべきである。

【解説】この第11文から第13文において、「世帯の学問」「帳合の学問」「時勢の学問」など当時の日本では学問と考えられていなかった学問分野が存在すること、存在すべきこと、開拓し創造すべきことを示唆している。

【語句】☆我邦の古事記：古事記は本居宣長らによる「国学」の聖典とされた。明治中期以後、1945年まで、国家によって、ここに書いてあることはすべて正しいとされた。☆米の相場：生活に不可欠なものの値段を知らない人は、という意味。☆世帯の学問：家計もしくは家庭の経営にかんする学問。

12. 【本文】経書史類の奥義には達したれども、商売の法を心得て正しく取引をなすこと能わざる者は、これを帳合の学問に拙き人と言うべし。

【現代語訳】四書や五経、中国大陸国家の歴史書類を深く知ってはいるが、商売の方法を心得て適切に取引をすることができない者は、これを会計・経理の学問に拙い人、と言うべきである。

【語句】☆経書史類：朱子によって儒学の基本的テキストとされた「四書五経」＝「大学」「論語」「孟子」「中庸」、「易経」「詩経」「書経」「春秋」「礼記」等を指す。福澤自身も中津時代にこれらを徹底的に学んだように、当時の士族の共通教養であった。☆奥義：深い意味。

☆商売の法…正しく取引を：後に福澤は、日本の商人は値段等が曖昧で商取引慣行が確立していないと批判している。こうした問題によって経営危機になった三井の経営再建に、弟子の中上川彦次郎が参画し今日の三越の定価販売の基礎を作った、とされている。

13. 【本文】数年の辛苦を嘗め数百の執行金を費やして洋学は成業したれども、
なおも一個私立の活計をなし得ざるものは、時勢の学間に疎き人なり。

【現代語訳】何年もの間辛く苦しい思いをして、何百両、何百円ものお金を使って洋学の勉強は一通り修了したけれども、官に頼らずに自分自身で私立して生計を立てることができない者は、時勢の学間に疎い人である。

【解説】士族の子弟を中心とする洋学修行者のなかにも、自分自身で事業を立ち上げようとする人は少なく、政府の官吏などになろうとする者が多かったことを、福澤は批判している。「四編」で福澤は、自分こそが出版、学校経営、その他の事業を、官に頼らず私立して進めてきた「改革家」であり、慶応の社中の学者もこの志をもっているとしながら、私立して事業を立ち上げ、学問を開拓創造することが「学者の職分」= dutyだと述べている。

14. 【本文】これらの人物は、ただこれを文字の間屋と言うべきのみ。

【現代語訳】こういう人々は、ただ「文字の間屋」と言うべきで、具体的な学問を展開する能力のない人であり、とても学者と呼ぶことはできない。

15. 【本文】その効能は飯を喰う字引に異ならず。

【現代語訳】その効能は、食事をする辞書と同じで、消費するだけで何物も生み出さない。

16. 【本文】国のためには、無用の長物、経済を妨げる食客と言うて可なり。

【現代語訳】国のためには無用の長物で、人々の暮らしを妨げる、寄生的な「食客」と言うべきである。

17. 【本文】故に世帯も学問なり、帳合も学問なり、時勢を察するもまた学問なり。

【現代語訳】つまり、家計も学問である。会計・経理も学問である。時勢を察することもまた学問である。(生活に関係のある物はすべて学問の対象になる。)

【解説】文字を知っているだけではだめだ、文字を活用しなければ、学者とはいえない、と強調してきた福澤は、ここで、文字を使い、これまでの学問の成果、既知の事柄を活用しながら、実際に新しく学問を開拓創造していくことを提案している。それは、当時学問の対象とは一般に考えられていなかった「世帯」「帳合」「時勢を察する」ことなど、生活にかかわるすべての分野についてである。そして、この精神は、『大学』における、「天下の物、理あらざるは莫し」だから「天下の物に即きて、その已に知るの理をもって益々これを窮め、もってその極にいたらしめる」という伝統的窮理学の精神を具体化することに他ならない。福澤は、すでに『帳合之法』という会計学翻案書を刊行していたが、明治14(1881)年刊行の『時事小言』で国家財政の立て直し、経済の活性化のためには、地場産業の近代化が必要だとして、酒造りを例に、学者と醸造かたが協力して酒造りの学問を創造発展させることを提案する。これは、ここで福澤が提起している生活に密着する学問を既知の学問成果を活用して創造発展させようとするものの一例である。

18. 【本文】何ぞ必ずしも和漢洋の書を読むことのみをもって、学問と言う理あらんや。

【現代語訳】どうして必ずしも、日本、中国大陸、西洋のものでも、書物を読むことだけを指して「学問」という理由があるだろうか。(生活に密接にかかわる事柄について、事実や関係、原因など探求し、とるべき行動や方策に付いて積極的な提案を行ってこそ学問の名に値するのだ。)

【解説】福澤は和漢の書物だけでは不十分で西洋の書物を読むべきだと強調したが、それはその内容の現実性、積極性の故であった。福澤において「学問の大趣意」はあくまでも生活に密着した学問を創造・展開することにあつたので、たとえ西洋のものであっても、書物を読むだけでは学問とはいえないと強調している。だが同時に、具体的な事柄を創造展開する「窮理学としての実学」のためには、既知の学問成果をもって、関係性や変化の原因という「理」を「窮めることが、今後の変化を予測する上で不可欠だという『大学』の学問伝統に

立っていた。この点では、たんに、現状を記述するに止まって、既知の研究成果を引き継ぎ発展させることなく、成功、失敗のいくつかの事例から将来を予測するに止まって、「知識の陳腐化」を嘆いている、表面的な「実学」主義に対する反省を迫っているともいえる。

19. 【本文】この書の表題は、学問のすすめと名づけたれども、決して字を読むことのみを勧むるに非ず。

【現代語訳】この本の表題は、「学問のすすめ」と名づけたが、文字を読むことだけを奨励しているのでは、決してない。

【解説】「論語」における「学」のコンセプトにもとづき、当時は「学問」=権威ある先生の話の聞く、権威ある書物を読む、という考え方が支配的だった。そこで、朱子学的伝統に基づく『大学』の「格物致知窮理」精神に基づく、生活に関係のある「天下の物に即して」具体的に学問分野を構築することの勧め、が主題であることをあらためて強調して締めくくりの文としている。そしてそのためには、次の第20文にあるように、市民社会の成熟という点では先行している「西洋」の研究成果の吸収が不可欠だと述べている。

20. 【本文】書中に記すところは、西洋の諸書より或いはその文を直ちに訳し或いはその意を訳し、形あることにても、形なきことにても、一般に人の心得となるべき事柄を挙げて学問の大趣意を示したものなり。

【現代語訳】この本の中で述べていることは、西洋の書物から、ある場合にはその文を直訳し、ある場合には意識して、形のある事柄についても、形のない事柄についても、すべての人にとって理解しておくべき事柄を取り上げて、(誰でも知っている『大学』が過去において大学で人を教える根本方針を示したように)「学問」の最も根本的な趣旨を示したものである。

【解説】ここで、「学問のすすめ」執筆の意図が「学問の大趣意を示す」ことになったことがあらためて述べられている。「初編」の「端書」では、「学問の趣意」とされていたが、「大趣意」とされたことから、福澤が予想しなかった「初編」に対する大反響に接した福澤の興奮が見て取れる。すでに指摘するように、「大学」の形式を意識しながら現代的内容によって換骨奪胎する方

法がとられているが、内容的には、「西洋の書物」を咀嚼して述べているものであることが、ここで端的に述べられている。福澤はすでに、「西洋事情」「世界国畫」等“西洋もの”のベストセラー作家だったが、ここであらためてそのことを自認したといえる。「その文を直ちに訳」した例としては、福澤と同じ中津藩の前野良沢らによる『解体新書』が、「その意を訳し」た例としては、福澤の父兄の師である帆足萬里『窮理通』などが意識されていたかと想像される。

21. 【本文】先に著したる一冊を初編となし、なおその意を拡してこのたびの二編を綴り、次で三、四編にも及ぶべし。

【現代語訳】（当初続編を書く意図はなかったのでたんに『学問のすすめ』として）すでに刊行したものを、あらためて「初編」として、そこで述べようとしたことを展開して、今回「二編」を書いた。今後は、「三編」「四編」も執筆刊行する予定である。

【解説】ここでは、続編執筆の意欲が示されている。続編は結局、明治九（1876）年刊行の「十七編」にまで及んだ。「初編」で出てきたテーマは、合本では、次のように展開された。《学問論・実学論》：初編、二編「端書き」、五編「明治七年一月一日の詞」第八段落後半部分、第九編「学問の旨を二様に記して中津の旧友に贈る文」、十編「前編の続、中津の旧友に贈る」、十二編「演説の法を勧むるの説」、十二編「人の品行は高尚ならざるべからざるの論」、十四編-1「心事の棚卸し」、十五編「事物を疑って取捨を断ずること」、十六編-2「心事と働きと相当すべきの論」《権利・平等・国家・国民論・私立論》：二編「人は同等なること」、三編「一身独立して一国独立すること」、四編「学者の職分を論ず」、六編「国法の貴きを論ず」、七編「国民の職分を論ず」《学者論・学校論・改革者論》：四編「学者の職分を論ず」「付録」、五編「明治七年一月一日の詞」、十二編「人の品行は高尚ならざるべからざるの論」《道德論・人間交際論》：八編「我が心をもって他人の身を制すべからざる」、十一編「名分をもって偽君子を生ずるの論」、十三編「怨望の人間に害あるを論ず」、十四編-2「世話の字の義」、十六編-1「手近く独立を守る事」、十七編-1「人望論」《亜細亞論、国際関係論》：十二編「人の品行は高尚ならざるべから

ずの論」第七段落、第八段落。

付記：

私が初めて福澤を本格的に読み始めたのは、梅原利夫（現和光大学教授）、増山均（現早稲田大学教授）、中江和恵（教育史研究家）さんたちと共に学んだ、東京都立大学大学院での故山住正己教授・総長の1973-74年度のゼミであり、筆者が修士課程1-2年生の時であった。故山住教授は、岩波書店『福澤論吉選集』や岩波文庫『福澤論吉教育論集』の編集を行った。また、福澤研究者としても著名な故丸山真男先生には、先生がかかわった「諸民大学三島教室」についてインタビューした際に、福澤についても教えをいただいた。また、韓国・翰林大学の池明観教授と金沢大学の南相燾教授には、2002年出版の韓国語版での共同作業を始め、朝鮮における「実学」や朱子学の研究に関連して多大の示唆をいただいた。ソウル大学の畏友・金信一教授を始めとする日韓社会教育セミナー、東アジア成人教育フォーラムの友人たちからも建設的批評をいただいた。私事ながら記して今後、遅筆・今後の福澤研究の継続を誓い、諸先生、諸学兄姉の学恩に報いたいと願っている。